

咸宜園開塾二〇〇年記念事業記録集

咸宜園

咸宜園教育研究センター

咸宜園開塾二〇〇〇年記念事業記録集

咸宜園



廣瀬淡窓

咸宜園教育研究センター



咸宜園開塾 200 年記念事業「記念式典」 平成 29 年 2 月 19 日（日）



嚶鳴フォーラム in ひた「鼎談」 平成 29 年 11 月 11 日（土）



咸宜園門下生子孫の集い「記念対談」 平成 30 年 2 月 24 日（土）



咸宜園門下生子孫の集い 平成 30 年 2 月 24 日（土）

ごあいさつ

豊後日田の出身で儒学者や漢詩人、そして教育者として活躍した廣瀬淡窓は、文化14（1817）年2月、36歳の時に日田郡堀田村で私塾「咸宜園」を創設しました。「咸宜」とは、「ことごとくよろし」という意味で、淡窓は塾生一人ひとりの個性や考え方を尊重した教育を行い、また年齢・学歴・身分を問わない「三奪法」や毎月の試験により塾生の学力を評価した「月旦評」など、淡窓の教育理念やその教育手法が評判となり全国から入門者が集まりました。淡窓の目指した教育とは、個性尊重の精神と実践力を高める実力主義に代表され、それから40年の間、教育一筋に邁進し我が国の社会発展のために有用な人材を育ててきました。

安政3（1856）年11月、淡窓は75歳でその生涯を終えましたが、その後も咸宜園は廣瀬青邨や林外をはじめとする歴代塾主に引き継がれ、明治30（1897）年に閉塾するまでに5,000人を超える若者が学んだ近世日本を代表する私塾でありました。

現在は茨城県水戸市や栃木県足利市、岡山県備前市とともに「教育遺産世界遺産登録推進協議会」を設立し、近世日本の教育を世界文化遺産に登録するための活動も行っております。また、平成27（2015）年4月には「近世日本の教育遺産群～学ぶ心・礼節の本源～」として日本遺産の国内第1号認定を受けるなど、国内での文化遺産としての評価も高まりつつあります。

そのような中で、平成29（2017）年2月に咸宜園は創設から200年を迎えました。そこで、平成28年度から29年度にかけて実施した「咸宜園開塾200年記念事業」を後世に伝えるとともに、今後の廣瀬淡窓や咸宜園の顕彰活動や記念事業のあり方を考える際に本書がその一助となれば幸いです。

日田市教育委員会
教育長 三笥 眞治郎

史跡「咸宜園跡」東家側 航空写真



例 言

1. 本書は、平成 28～29 年度にかけて、日田市・日田市教育委員会が主催した「咸宜園開塾 200 年記念事業」の事業内容及び関連記事などをまとめた記録集である。
2. 本書に掲載した講演録並びにシンポジウムの文字起こしについては、録音データを基に文章化し、細部は講師やパネリストからの補足等をいただくとともに、編集作業の一部では PHP 研究所の協力をいただいた。
3. 新聞掲載記事については、出典を明らかにするとともに必要な関係機関には掲載の許可をいただいた。
4. 本書の編集は主に咸宜園教育研究センターの吉田博嗣が担当し、監修は咸宜園教育研究センターが行った。

目 次

【事業編】 講演会・シンポジウム・展示会等

咸宜園開塾 200 年記念事業一覧	1
咸宜園開塾 200 年記念事業（リーフレット・チラシ等）	2
咸宜園開塾 200 年記念講演会	6
「偉大なる教師―廣瀬淡窓と吉田松陰」海原 徹 氏	
嚶鳴フォーラム in ひた	
記念講演会「卒寿を迎えて今、廣瀬淡窓に魅せられたわけ」童門 冬二 氏	12
記念鼎談「先哲に学ぶ―歴史が現代に語りかけるものとは？」	18
パネリスト：童門 冬二 氏・吉田 公平 氏・後藤 宗俊 氏	
コーディネーター：岡野 涼子 氏	

【資料編】

咸宜園開塾 200 年記念事業に関する新聞掲載記事	25
追悼：葉室麟さんと咸宜園	32

【資料編】

廣瀬淡窓・咸宜園の顕彰活動のあゆみ	37
-------------------	----

協力者・協力機関（順不同・敬称略）

本書の作成にあたっては、御講演や御登壇いただいた方、関係団体や個人の方々の協力のもとに作成することができました。全ての関係者に記して感謝の意を表す次第である。

廣瀬貞雄・廣瀬洋一・中島龍磨・園田大・童門冬二・吉田公平・海原徹・後藤宗俊・寺田昭一・後藤恵子・公益財団法人廣瀬資料館・PHP 研究所・徳間書店・葉室麟事務所・日田先哲研究会・大分合同新聞社・西日本新聞社・読売新聞西部本社・毎日新聞社

咸宜園開塾 200 年記念事業

事業編

史跡「咸宜園跡」 右は秋風庵、左は遠思楼



咸宜園開塾 200 年記念事業一覧（プレイベントを含む）

1 咸宜園開塾 200 年記念プレイベント

◆咸宜園開塾 200 年・二松學舎創立 140 年「咸宜園開塾 200 年プレイベント講演会」

平成 28 年 12 月 5 日（月）

講師：二松學舎大學長 石川忠久氏

場所：日田市役所大会議室

主催：日田市・日田市教育委員会 共催：二松學舎大學

◆企画展「廣瀬旭莊・敬四郎文庫」～旭莊子孫に伝承した史料群～

平成 29 年 2 月 16 日（木）～3 月 31 日（金）

場所：咸宜園教育研究センター公開展示室

主催：日田市・日田市教育委員会

2 記念式典・記念講演・記念鼎談

平成 29 年 2 月 19 日（日）

場所：日田市民文化会館（パトリア日田）大ホール

主催：日田市・日田市教育委員会

3 記念遺墨展「咸宜園門下生遺墨展」

平成 29 年 9 月 3 日（日）～17 日（日）

場所：日田市民文化会館（パトリア日田）ギャラリー

主催：日田市・日田市教育委員会 共催：日田先哲研究会

4 嚶鳴フォーラム in ひた

平成 29 年 11 月 10 日（金）～11 日（土）

・開会イベント（10 日）嚶鳴協議会加盟市町及び市町民（咸宜小学校体育館）

・ふるさと先人交流会（10 日）嚶鳴協議会加盟市町及び市町民（日田温泉旅館街）

・記念講演会・記念鼎談（11 日）（日田市民文化会館 パトリア日田小ホール）

講師：童門冬二氏、鼎談：童門冬二氏、東洋大学名誉教授 吉田公平氏、別府大学名誉教授 後藤宗俊氏

主催：日田市・日田市教育委員会 共催：嚶鳴協議会

5 咸宜園門下生子孫の集い（記念式典・記念講演会・交流イベント等）

平成 30 年 2 月 24 日（土）～25 日（日）

・記念式典（24 日）日田市民文化会館 パトリア日田小ホール

・記念講演（24 日）講師：法政大学総長 田中優子氏（日田市民文化会館 パトリア日田小ホール）

・記念対談 法政大学総長 田中優子氏 × 別府大学名誉教授 後藤宗俊氏（日田温泉旅館街）

場所：日田市民文化会館（パトリア日田）小ホール・豆田町ほか

主催：日田市・日田市教育委員会 協力：公益財団法人廣瀬資料館・照雲山 長福寺

6 記念出版

『図説 咸宜園—近世最大の私塾』 発行：日田市教育委員会 平成 29 年 2 月発行

『廣瀬淡窓日記（続編 1）』 発行：日田市教育委員会 平成 30 年 3 月発行

咸宜園開塾 200 年記念事業 (リーフレット・チラシ等)

咸宜園開塾200年
200年記念
イベント
講演会
松本台開塾140年

明治期の 咸宜園関係の 漢詩人たち

平成28年12月5日(月)
時間 19:00 ▶ 20:45 ※開場は18:30
会場 日田市役所7階大会議室

【講師】
二松学舎大学名誉教授
全国漢文教育学会会長・漢学文化振興協会会長
全日本漢詩連盟会長・邦文会理事
石川忠久氏

【主な著書】
『漢詩への応用(文藝春秋)』・『日本人の漢詩(大修館書店)』
『漢詩の心』(講談社)

【申込方法】 先着150名様
住所・氏名・連絡先をご記入の上、下記に郵送・FAX
又はメールで申込み **申込期間 11月15日(火)まで**

【お問い合わせ先】
咸宜園教育研究センター(毎週水曜日休館)
〒877-0012 大分県日田市浜野2丁目-2-18
TEL/FAX.....0973-22-0268
E-mail.....kangien@city.hita.oita.jp

主催：日田市・日田市教育委員会 共催：二松学舎大学 文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業「近代日本の『塾』の形成と漢学」

イベント講演会 講師 石川 忠久氏



平成28年度 咸宜園教育研究センター春季企画展

咸宜園開塾200年記念

『廣瀬旭荘・敬四郎文庫』

～旭荘子孫に伝承した史料群～

日田市教育庁咸宜園教育研究センター

企画展「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」～旭荘子孫に伝承した史料群

咸宜園開塾200年記念事業 記念式典・記念講演・記念鼎談

日時 平成29年2月19日(日)10:00～12:30
場所 日田市民文化会館「バトリア日田」大ホール
主催 日田市・日田市教育委員会



咸宜園開塾200年記念事業 講師等紹介



海原 徹
Tetsu Yoshida

昭和11年山口県生まれ。京都大学卒。
京都大学助教授、同大教授を経て、現在、京都大学名誉教授。
元京都大学文学部長、教育学博士。咸宜園教育研究センター運営委員、専門委員、
日田市世界遺産登録検討委員会委員を歴任。
著書に『近世私塾の研究』(1983年)、『吉田松陰と松下村塾』(1990年)、『
広瀬淡窓と咸宜園』(2008年)等多数。
NHK大河ドラマ『花燃ゆ』(2015年)の時代考証を担当。



広瀬 勘貞
Kazumasa Hirose

昭和17年大分県日田生まれ。
東京大学法学部卒。1966年通商産業省(現・経済産業省)入省。
在スペイン日本大使館一等書記官、中小企業庁計画部長、内閣府理大臣秘書官、
通商産業省貿易局長、通商産業省機械情報産業局長を経て、1999年通商産業省
事務次官、2001年経済産業省事務次官を歴任。2003年に大分県知事当選。
2010年九州地方知事会会長就任。咸宜園発達の礎で、日田の歴史にして内閣のなどの
財政改革に尽力した廣瀬久兵衛の子孫。



大石 学
Masahiro Ochi

昭和28年東京生まれ。
東京学芸大学副学長、同教授、水戸市世界遺産登録検討委員会委員。
専門は日本近世史。著作に『近世藩制・藩校大辞典』(編、吉田弘文館、2006年)など。
名城大学教授、東京学芸大学助教授などを経て退職。
また、『新選組!』(2004年)、『肥後』(2008年)、『龍馬伝』(2010年)、『
八重の桜』(2013年)、『花燃ゆ』(2015年)等のNHK大河ドラマや映画『沈黙』
(2017年)など、ドラマ・映画の世界で時代考証を担当。

平成28年度咸宜園教育顕彰事業受賞者紹介

教育文化部門 個人賞

- 【名前】 点訳ボランティアたんぽぽの会
- 【所属】 日田市社会福祉協議会
- 【活動】 咸宜園関連書の点訳及び点訳書の寄贈 (視覚障がい者・団休等への咸宜園・廣瀬淡窓の普及啓発)

「咸宜園の日」とは
市では廣瀬淡窓先生が文化14年(1817)2月23日、現在の咸宜園の地に移り住んだ日にちなみ、
淡窓先生や咸宜園教育について理解を深めてもらうために制定いたしました。

ごあいさつ

一次 第一

日田市教育長 三笥 眞治郎

「咸宜園の日」記念式典並びに「咸宜園門下生子孫の集い」を開催するにあたり、主催者を代表いたしましたことあいさつ申し上げます。

豊後国日田で生まれた儒学者の廣瀬淡窓先生は、24歳の文化2年(1805)に豆田町の「長福寺寮」において初めて塾を開きました。その後、塾は「咸章舎」から「桂林園」へと塾の名前や場所を変えながら規模を拡大し、文化14年(1817)2月23日に現在の場所で私塾「咸宜園」を創設いたしました。昨年は、開塾から200年の節目を迎えたところでございます。

本市では平成23年度から毎年2月23日を「咸宜園の日」と定め、咸宜園の理念と業績、廣瀬淡窓や門下生等についての理解を深め、郷土を愛する心の醸成を図るため各種事業に取り組みしております。

本日の第一部では「咸宜園教育顕彰事業」や「日本遺産活用アイデア募集事業」、「咸宜園世界遺産登録推進・小学生作文コンクール」など関係団体や市民の優れた取組みについて表彰や発表を行うものでございます。

「咸宜園教育顕彰事業」とは、廣瀬淡窓や咸宜園の調査・研究活動の発展ならびに咸宜園教育の普及に貢献した個人および団体の活動を表彰するために創設したものでございます。本日、受賞されます教育文化部門の淡窓研究会様には心からお慶びを申し上げます。淡窓研究会様におきましては、長年、東京において廣瀬淡窓や門下生、また咸宜園教育についての研究会を開催され、研究や普及・啓発に努めてこられたことが評価されたものでございます。

さて、市では平成22年の咸宜園教育研究センターの開設、世界遺産推進室を併せて設け、茨城県水戸市の「弘道館」、栃木県足利市の「足利学校」、岡山県備前市の「閑谷学校」とともに「近世日本の教育遺産館」の世界遺産登録に向けた取組みを進めております。またその過程で平成27年(2015)には、文化庁が新たに創設した「日本遺産」の第1号認定を受け、地域と一体となった取組みを進めているところでございます。

今回、「咸宜園開塾200年記念事業」の締めくくりに行事といたしまして、「咸宜園の日」記念式典と併せて「咸宜園門下生子孫の集い」を開催いたします。

「咸宜園門下生子孫の集い」とは、平成2年(1990)に日田市民の有志で構成された「地域活性化懇話会」が始められた「咸宜園門下生全同窓会」を前身とするもので、今回は平成22年度の開催に就くものでございます。日本全国から咸宜園門下生の方々にお集まりいただきまして、ご親交を深めながら皆様のご先祖が学び、日々を過ごした咸宜園や日田の町を十分に堪能いただきたいと思います。

結びに、本日の記念事業を開催するにあたり御協力を賜りました関係機関、並びに受賞者の選考に御尽力をいただきました審査委員の皆様方に御礼申し上げますとともに、本日、記念式典並びに「咸宜園門下生子孫の集い」に御参加を賜りました皆様方へ、今後益々の御健勝をお祈り申し上げます。御挨拶といたします。

オープニング：詩吟「休道の詩」 日曜こども園園児(13:00～13:05)

第1部 「咸宜園の日」記念式典(13:05～14:30)

- (1)開会
- (2)主催者あいさつ 日田市教育長 三笥 眞治郎
- (3)平成29年度咸宜園教育顕彰事業表彰式

受賞者 【教育文化部門】
優秀賞 淡窓研究会
講評 審査委員長
咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊

- (4)日本遺産活用アイデア募集事業表彰式(日田市日本遺産活性化懇話会主催)

受賞者 【アイデア部門】
優秀賞 春末 京香さん (大分県立日田高等学校3年)

- (5)発表会
特別発表 「咸宜園世界遺産登録推進・小学生作文コンクール」
(豆田町地区振興協議会主催)

最優秀賞 桂林小学校6年 岩木 日菜乃さん
優秀賞 桂林小学校6年 長木 大暉さん
優秀賞 桂林小学校6年 川内 海輝さん
優秀賞 咸宜小学校6年 藤原 梨暖さん

- (6)閉会

「門下生子孫の集い」

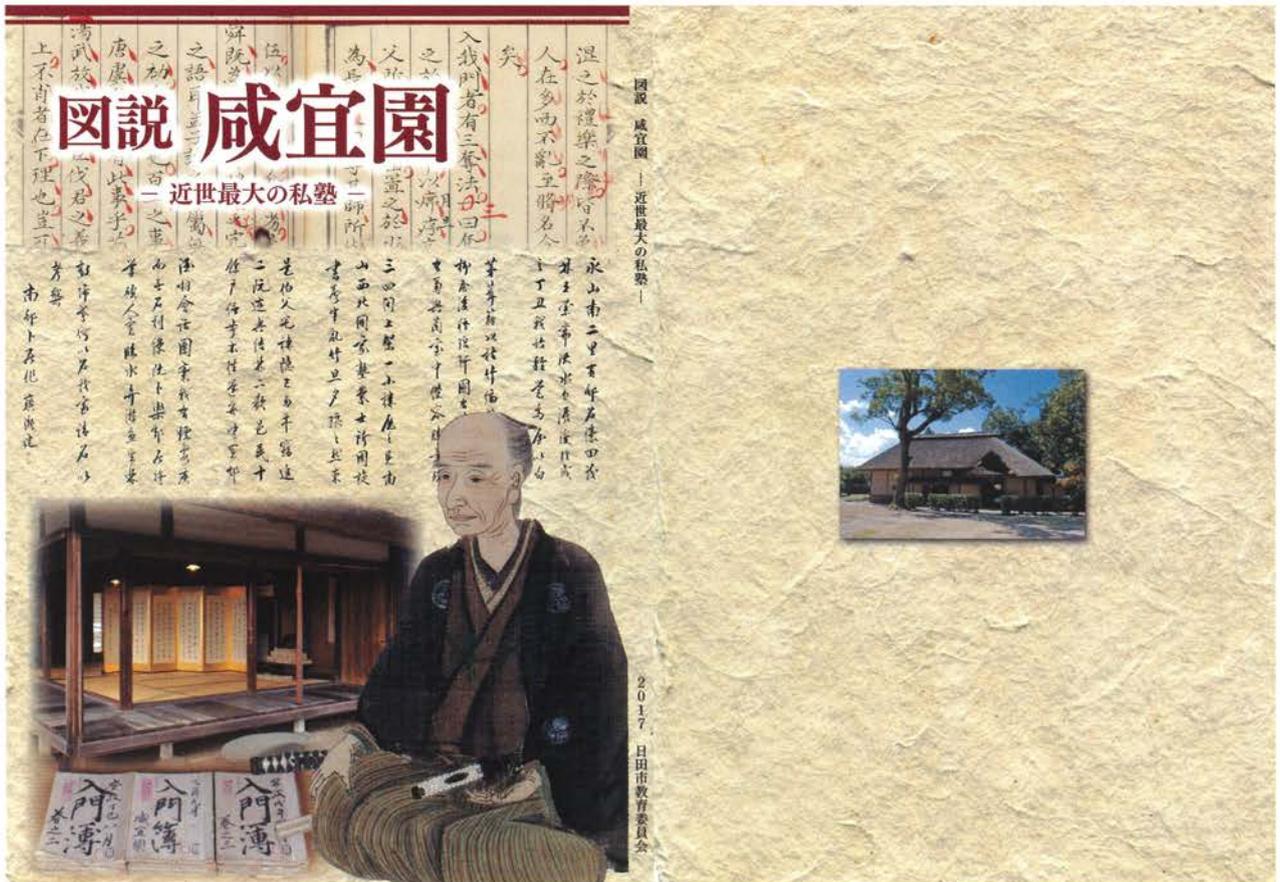
廣瀬家代表・門下生子孫代表あいさつ
廣瀬 貞雄 氏 (廣瀬家第11世・公益財団法人廣瀬資料館理事長)
記念講話 「咸宜園と門下生たち」
別府大学名誉教授 後藤 宗俊 氏

第2部 咸宜園開塾200年記念講演会(15:00～16:30)

「江戸時代の人々にとっての学び」
法政大学総長 田中 優子 氏

- 閉会(16:30)

「咸宜園の日」記念式典・咸宜園開塾200年記念事業「咸宜園門下生子孫の集い」(52～53頁)



記念出版『図説 咸宜園—近世最大の私塾』

偉大なる教師—広瀬淡窓と吉田松陰

海原 徹

はじめに

只今ご紹介にあずかりました海原でございます。本日は、講演タイトルに掲げましたとおり、江戸時代を代表する有名私塾、咸宜園と松下村塾を主宰した二人の偉大なる教師、広瀬淡窓と吉田松陰を取り上げて、お話し申し上げます。

私に与えられた時間は、およそ一時間ということですので、お手元にお配りしたレジュメで予告した 13 の項目を、すべて詳しくご説明することは、多分出来かねるかと思存じます。なるべく順序立て、過不足ないようにお話し上げるつもりですが、時間の関係上、資料参照というかたちで、適宜お話を端折り、説明を取捨することもあるかと存じます。その辺のところは、よろしくご容赦のほど願ひ申し上げます。

なお、省略した部分は、あとで、お手元のレジュメでご確認頂ければ幸いです。



(1) 生・没年と出自・身分

広瀬淡窓は、天明二(1782)年 4 月 11 日、豊後日田郡御幸通豆田魚町の掛屋・八軒士、広瀬三郎右衛門の長男として誕生しました。幼名は寅之助、修業時代は一時玄簡、長じて求馬と称します。よく知られた淡窓という呼び名はその号であり、文政元(1818)年、37 歳の頃から使い始めたようです。

早くから健康に恵まれず、成人してからも大病を繰り返し、病床に伏すことの多かった淡窓ですが、晩年は、体調もやや安定し、概して無難な老年時代を過ごしています。安政三(1856)年 11 月 1 日没、享年 75 歳。平均寿命 40 歳そこそこの当時としては驚異的な長寿を全うした人です。

吉田松陰は、文政一三(1830)年 8 月 4 日、萩藩の無給通士(26 石) 杉百合之助の次男として長門萩城下松本村に生まれました。幼名は生年の寅年にちなみ虎之助、長じて大次郎、松次郎、寅次郎などと称します。

五歳のとき、父方の叔父吉田大助、大組士山鹿流兵学師範(57 石)の養子となり、六歳でこの家を継ぎますが、嘉永五(1852)年 12 月、23 歳のとき、藩許を得ずに出発した東北脱藩行を咎められ土籍削除、浪人となります。なお、人口に膾炙した松陰という呼び名は、幾つかあった号の一つであり、脱藩行の罪で国元萩へ送還され、藩の裁きを待つ自宅謹慎中に使い始めたものです。

安政六(1859)年 5 月、井伊大老の安政大獄で江戸檻送となり、10 月 27 日、老中間部詮勝暗殺計画の罪で刑死、僅か 30 歳という若さで世を去ります。同時代を生きた二人ですが、松陰は、淡窓より 48 年遅く生まれており、実に半世紀近くの年齢差があります。世代的には、祖父と孫のような関係といえます。

(2) 生い立ち、家庭環境、学歴

正確な理由は分かりませんが、淡窓は、二歳から六歳まで生家を離れ、堀田村で秋風庵を営んでいた伯父月化(平八)の元で大切に育てられております。俳諧の分野で第一人者、日田有数の文人として知られたこの伯父の存在は大きく、早くから読み書きの手ほどきを受けていますが、本格的な勉強は、生家に戻った頃からです。初め能書家で知られた父三郎右衛門や長福寺の法幢上人、やがて椋野玄俊や頓宮四極らの先生に学んでいます。寛政二(1790)年、九歳の頃、日田に現れた久留米の浪人松下勇馬(西洋)に師事します。九州三才の一人といわれた高名な学僧、竹田村広圓寺の法蘭上人の門を叩いたのも、同じ頃です。

叔父大助の死後、6 歳で吉田家の当主となった松陰は、山鹿流兵学師範、藩校明倫館教授になるための猛烈な個人レッスンを受けています。初め父百合之助や叔父玉木文之進、やがて藩から任命された大勢の代理教授者や家学後見人らについて学びます。山鹿流兵学だけでなく、長沼流兵学、萩野流砲術、西洋陣法なども学んでおります。

なお、彼には明倫館への入学経験はありません。天保九(1838)年正月、9 歳で家学教授見習として出仕、以後、ずっと教師の身分であったためと思われれます。

(3) 遊学経験、行動半径の違い

生来病弱な淡窓は、75 年の生涯を通じ、九州の北半分を数回旅したことがありますが、馬関より先の地へ足を

延ばしたことはありません。他国の情報は、諸国を旅した友人知己や全国各地から来る塾生たちから聞き、幕閣や海外の最新情報は、日田代官所経由で入手しております。

遊学経験も極めて少なく、10代半ばの頃、二度しかありません。寛政七（1795）年4月から8月まで、佐伯城下の藩校四教堂で教えていた松下西洋について学び、また寛政九年正月から同一年12月まで、福岡藩儒亀井昭陽に教えを乞うております。14歳の佐伯遊学は四カ月ほどで終わりますが、16歳から18歳までの福岡遊学も、火事で師家が焼失する事故や疫病流行を恐れて数カ月間帰郷するなどの空白があり、実際に在塾したのは、二年足らずにとどまります。両度の遊学を合わせ、たかだか二年余の短期間です。

松陰は、嘉永三（1850）年8月、21歳のときに試みた九州遊歴から7年3月のアメリカ密航計画、いわゆる下田踏海事件まで、僅か四年足らずの間に、大小七回の遊学を経験しており、その足跡は、北は津軽半島の竜飛崎から、南は九州の長崎、島原半島にまで及んでいます。残された旅日記によれば、総計2362.5里、すなわち9450キロメートル、日本列島を一往復半するくらいの長い距離となります。松陰が海防問題を論ずるとき、自らの足で歩き、目と耳で見聞した情報をふんだんに織り込み、話に説得力があり、授業が面白かったというのも納得がいきます。

（4）なぜ教師になったのか

広瀬家の長男として家業を継ぐことを周囲から期待されていた淡窓ですが、10代後半の頃は、病気がちでたえず医者にかかり、ほとんど半病人の状態でしたから、もはや誰の目にも家業を継ぐのは無理、天領日田はもとより、全国各地を駆け巡る御用商人のような激職は務まらないことが明白でした。

亀井塾から戻った頃の淡窓は、初め医師、それも比較的容易な眼科医になろうとしましたが、良師に恵まれず、早々に断念します。体調がよくなると、時おり周囲の人びとに教えていますが、これを本職にしようとしていたわけではありません。上洛して学問を続け、諸藩への仕官の道を探すという話は、健康上の理由で諦め、また対馬藩学問所や江州彦根藩儒官の口も家族の反対などでうまくいかず、何を生涯の仕事にすべきか、しばらく悶々とする日々を送っています。たまたま出会った医師倉重湊に教えを乞い、君の行くべき道は天が定めたとおり、教師になる以外にない、「儒士為ツテ活計二窮セハ、何ソ飢エテ死セサルヤ」との一喝で、ついに開塾を決断します。文化二（1805）年3月、24歳のときです。

幼少時から山鹿流兵学師範の家を継ぎ、教師になることを宿命づけられていた松陰には、職業選択の自由などまったくなく、物心ついたときから、ひたすら教師になるための勉学に励んでいます。9歳で家学教授見習、10歳で家学教授に任じた頃は、まだ名義上の教師にすぎませんが、弘化五（1848）年正月、19歳のとき、家学後見人をすべて解かれ、独立の師範となっています。明倫館兵学教授として本格的なスタートです。

（5）教えた期間、教職歴

文化二（1805）年3月16日、24歳のとき、豆田町の長福寺学寮を借りて開塾した淡窓は、数カ月後には魚町の生家に戻り、南家後園の土蔵を教室として教え始めます。ただ、これはあくまで一時の仮住まいであり、間もなく花月川を臨む大阪屋林左衛門の家に転居します。八畳と六畳の二間をあてた成章舎と称する塾舎です。この塾舎も長続きせず、しばらくもとの土蔵に教室を移していますが、文化四（1807）年5月、長福寺から東へ20～30メートル入った地に桂林園を設けました。文化一四年2月、36歳のとき、子ども時代を過ごした堀田村の秋風庵に隣接する地に咸宜園を創め、75歳で没するまで教えました。長福寺学寮時代から数えれば、実に計51年7カ月の長きに及ぶ教職歴です。

弘化五（1848）年正月、19歳で兵学師範として独立した松陰は、藩校明倫館で教鞭を執り、嘉永五（1852）年12月の土籍削除まで約四年間在籍していますが、途中、九州や江戸、東北地方など、諸国遊歴に忙しく、実際に兵学教室で教えたのは、二年二カ月余にすぎません。

松下村塾は、安政三（1856）年3月、獄舎を出て自宅閉居中の松陰が、秘かに周辺の人びとを対象に教えたことに始まります。教室は、初め生家の一室をあてた三畳半の幽室でしたが、翌四年11月には、もと厩舎を修復した八畳一間の塾舎に移り、三カ月後にはこれを増築して、今の一八畳半の大きさとなっております。この間、塾生がしだいに増加し、塾舎が手狭になったためです。

安政五年7月20日、家学教授が公許され、幽室時代から続いたお上の目を憚る、いわば非合法の授業も、ようやく陽の目をみることとなりますが、12月末には、早くも野山再獄となり、閉塾を余儀なくされます。結局、松陰が村塾で教えたのは、幽室時代をふくめ2年10カ月余、それ以前の明倫館教授としての在職期間を合わせても、計五年余の教師経験にとどまります。半世紀を超える淡窓の教職歴とは雲泥の相違です。

(6) 二人の接点、出会いを阻んだもの

もと萩藩士の松陰が、嘉永七(1854)年3月27日、国禁を犯してアメリカ密航を企てた、いわゆる下田踏海事件は、朝野の耳目を驚かせた大事件であり、すぐに全国各地に喧伝されました。天領日田の地にも、公私両面のルートで伝えられ、早々と淡窓が耳にしたのは間違いありません。

欧米列強の圧倒的な軍事力をみれば、幕府の祖法、鎖国政策をこのまま継続することはもはやできないと考える淡窓は、開国の要求を拒否、戦火に焼かれ焦土と化しても断固戦うべしと叫ぶ鎖国攘夷を書生の暴論として退け、今は開国和親、交易の道を歩むべきと唱えていました。幕府の開国路線を積極的に支持する立場であり、海外遊学をめざす松陰の行動は、国法を犯したとはいえ、それなりに評価できる壮挙であったはずですが、この件については終始沈黙し、感想めいたことも一切口にしていません。永年に及ぶ塩谷代官との確執に悩まされたこともあり、官府の塾経営への関与を嫌い、政治的問題に関する発言には、とくに慎重であった淡窓らしい反応です。事件に言及すれば、黒船来航をめぐる、攘夷か開国かで対立しているホットな政治的議論に巻き込まれかねない、それが官府との新しいもめ事の種になることを怖れたのかもしれませんが。ともかく、この件については、奇妙なくらい無関心の姿勢を一貫しております。

松陰が九州遊歴を試みた頃、防長二国から日田への遊学生はすでに150人近くを数えており、萩城下からも沢山の来学者がありました。若い好奇心旺盛な松陰がこうした動きに無関心であるはずはなく、帰国した卒業生を通じて、淡窓や咸宜園に関するさまざまな情報を得ていたことは想像に難くありません。

松陰自身は、嘉永三(1850)年夏の九州遊歴、三年後の六年秋、ロシア軍艦を求めて江戸と長崎を往復した時、何度も日田の近くを通過していますが、咸宜園に淡窓を訪ねようとしたことは、一度もありません。九州遊歴のさい、松陰が教えを乞うた佐賀の草場珮川や長崎の高島浅五郎らはかねて淡窓と親しく、また長崎では、咸宜園で数年間学び、月旦二権八級下、権舎長で卒業した佐藤謙太郎を訪ねており、その都度、淡窓や咸宜園が話題になったことは、十分うかがえます。旅に出て新しい国に入ると、真っ先に、その地の名士の門を叩き、意見を交わすことをテーマにしていた松陰が、日田を素通りするとは、いささか理解に苦しむ行動ですが、あるいは淡窓を詩文に優れているが、時事問題には疎い文人・学者のタイプとみて、あえて接触を避けたのかもしれませんが。

淡窓には無関心を装った松陰ですが、大坂で開塾していた弟旭莊(謙吉)、下田踏海の拳を共にし、獄中で死んだ金子重之助を悼む詩を寄せた彼には、早くから強い親近感を抱き、同志の一人と見ております。安政五(1858)年2月、萩城下に旭莊が来たときには大いに喜び、その意見を藩政改革に役立てるように進言していますが、獄中の松陰には、それ以上のことはできませんでした。

(7) 学塾の性格、タイプ

幕府昌平校や諸藩藩校などの官・公立学校がなお未発達な時代に封建教育を実質的に担ったのは、民間在野の私塾です。幕藩体制の維持・運営に必要なさまざまな人材、とりわけ政治の枢要に連なる上級武士、専門的な学者、高級医師などの育成は、すべて私塾という教育の場で行われました。その意味で、私塾は官・公立学校の代替物であったといえます。伊藤仁斎の古義堂や中江藤樹の藤樹書院など、もっとも早く登場した私塾です。

時代が下がり、官・公立学校がしだいに整備、充実されてくると、今度は私塾がその周辺や空白を埋める役割を果たすようになります。入学資格のない他国人や農・町民に広く門戸を開放、また朱子学中心の漢学だけでなく、国学や蘭学など諸学を教授したのも、やはり私塾です。要するに、官・公立学校の欠落部分を補い、封建教育を全体として実りあるものにしたという意味で、私塾はその補完物にほかなりません。江戸中期以後、全国各地に登場した多くの私塾がこのタイプであり、咸宜園は、その代表例でした。

幕末期になると、単なる代替物や補完物に飽き足らず、学校革新の一種として、既成の学校体制に対抗する、いわば反対物に傾斜する私塾が出てきました。政治結社の私塾の名にふさわしく、官・公立学校との関係でいえば、しばしばその反対物でした。

その先駆は、おそらく天保八(1837)年2月、大塩平八郎の乱へ多くの塾生を送り込んだ大坂天満の洗心洞塾あたりに遡ると思われませんが、代表例は、やはり吉田松陰の松下村塾でしょう。幽室時代から数えて、僅か三年足らずの短期間に、高杉晋作や久坂玄瑞ら、幕末維新史を彩る多くの政治的人間、いわゆる志士の輩出を結果したのは、よく知られた事実です。

(8) 何のために学ぶか、人づくり論

咸宜、ことごとく皆宜しいという塾名が端的に物語るように、淡窓は、すべての人を大いなる天命を受けた、それぞれに潜在的な能力を約束された代理不可能の存在であるとみています。各人の賢愚や才不才の違いを、すべて掛け替えのない個性、さまざまな可能性であると肯定的にとらえ、教師の仕事は、そうした能力をうまく引き出し、

十分に発展させることにあつたと思つた。

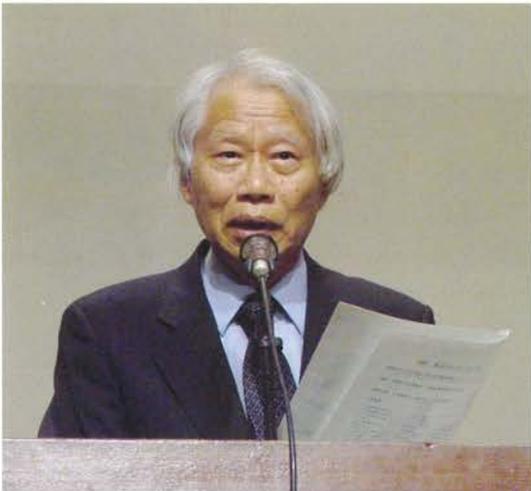
咸宜園の三奪法、年齢の大小でなく「入門の先後」、学識の有無でなく「課程の多少」、階級の上下でなく「月旦の高下」、すなわち年齢、学歴、身分の如何を一切問はず、学に志す人ならば誰でも平等に迎え入れ、学力の高低ですべてランキング化する、徹底した門戸開放と実力主義の教育は、こうした人間解釈を踏まえたものです。

では、何のために学ぶのか、咸宜園の塾生たちは、彼自身の修業、人格完成のために、今この場に会し、懸命に頑張っているものであり、それ以外の何ものでもありません。誰の命令、どこから強制されたわけでもなく、各人の自由な意思で咸宜園の門を叩き、自らが納得するまで学に励みました。

教育の内容や方法は、同時代の多くの学塾とさして変わらず、四書五經に代表される漢学的教養を基本としていますが、その際、淡窓がもっとも重要視した、いかにも咸宜園らしい特色は、訓詁の学を徹底的に排し、漢籍を読む力だけでなく、むしろ詩を学ぶことを通じて豊かな情感を身につけ、人間形成に至ると考え、詩作を教育の中心に位置づけたことです。詩の道から教育に入り、しだいに道徳や文章をプラスしながら、それぞれの人間形成を全うできるというわけです。

野山獄中で書いた「福堂策」と題する獄制改革論で、人の犯した罪は一時の病であり、この病が治ればもとの健康体に戻るといふ松陰は、「人賢愚ありと雖も、各々一二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず全備する所あらん」、獄に繋がれている罪人をふくめ、すべての人にそれぞれ長所や利点があり、否定されるべき人など、どこにも存在しないと、あらゆる人間に潜在する可能性の発現に期待しています。根っからの悪人などいない、誰でも努力すれば善人になれるという徹底した性善説、教育へのほとんど全幅の信頼であり、この点は、咸宜園のごとく皆宜しいとまったく同じ人間観であり、またその教育論にも通底する部分が多々あります。

塾の教育方針は、安政三（1856）年秋、外叔久保五郎左衛門のために書いた「松下村塾記」に詳述されています。村塾の教育が松本村の風教を興し、それがしだいに萩城下から藩内全域、やがて全国各地へ拡大されて世直しに至る、そのことを可能にする人材教育をめざすというわけです。



何のために学ぶかという塾生たちの問いに、いつも松陰は、「経世済民」、世の中を治め、民を救うためであると答えています。新入生がくると、必ず松陰は、「学者になってはいかぬ。人は実行が第一である」、学ぶのは何かを為すためである。世のため人のために役立つのは何かを常に考えながら学ぶべきである、と繰り返したといひます。眼前の時事問題、今の世の中をどうとらえ、いかに関わっていくのかを絶えず考える勉学の中から、政治的活動に身を投じる多くのいわゆる志士を輩出したのは、当然の帰結でいえます。この辺は、詩文を大切にされた咸宜園の教育などは、はっきり一線を画しています。

(9) 実力主義、競争主義の導入

三奪法を積極的に活用し効果的にするには、年齢、学歴、身分に取って代わる新しい評価基準が必要になりますが、咸宜園では、それが一月の教育活動の成果である塾生各人の学力判定、毎月九回実施される定期試験と平常点を合わせた点数の大小による月旦評システムで行われました。塾生が十数人しかいない成章舎時代には、まだ四等級しかありませんが、塾生が増加し、学力差が際だつようになると、六、七、八としだいに等級を増やし、天保一〇（1839）年3月改定の月旦評では、九級上下に無級を合わせ、実に総計19ランクの多くに及んでいます。学力に見合った等級にクラス分けし、徹底的に競争させることで、各人の能力を最大限に展開できると考えたわけです。

幽室時代から数えて2年10カ月余の間に、松下村塾の門を叩いた塾生は計90余人に達しますが、彼らが一度にやって来たわけではなく、常時出入りしたのは、多くて5、6人、少ないときは2、3人にすぎません。安政五（1858）年2月、増築して一八畳半の塾舎となった最盛期でも、稀に十数人の塾生が会したことはありますが、いつもは、これまでと変わらず、数人を相手にするミニ・サイズの授業でした。

それゆえ、塾生全体を対象にした時間割や教科書のようなものは一切必要がなく、不定期的に現われ、学力もそれぞれに異なる塾生に対して、各人ばらばらの授業が行われました。所定のカリキュラムなど存在しない、その意味ではもっとも学校らしく学校、いわばフリースクールのような存在でした。

塾生の少ない松下村塾には、もともと競争主義を持ち込む余地がなく、現に、点数評価して塾生を序列化したことは一度もありません。ただ、個人レベルでは、松門の竜虎と並び称された高杉晋作と久坂玄瑞をあえて比較して、互いに競わせたように、ある種の競争主義を持ち込んでいます。同年配の塾生がいると、その名前を挙げて、君は

まだ勉強が足りない、このままでは彼に負けてしまう、もっと頑張れと励ます、つまり競争意識をかき立てるのも、松陰がよく使った手法です。むろん、点数の大小を競わせてランク化するのが目的ではなく、塾生を互いに競わせ、すべてが同じレベルに達することをめざしていたのです。

(10) 塾を選んだ理由

文政三（1820）年に120人を数えた咸宜園の月旦評は、その後も順調に増え続け、嘉永元（1848）年には200人を超え、五年6月の最盛期には、実に233人の多くを数えました。官・公立学校をふくめ、近世期最大の学塾として人気絶大を誇ったわけですが、その最大の理由は、おそらくこの塾に数年間在学して真面目に勉強すれば、確実に高い学力が身につくという、完成度の高い教育システムへの期待でしょう。実力主義に裏打ちされた咸宜園の月旦評の上位にランクされれば、社会的評価が高く、卒業後の就職にも大いにプラスする、その意味では、教育投資が目に見える確実な成果につながる、費用対効果に優れた、いわば役に立つ勉強が保証される学塾だという評価にほかなりません。

萩城下の人びと、とくに親たちの世代は、国禁を犯した大罪人という前歴を持ち、獄を出たが、なお自宅塾居中の松陰に強い違和感を抱き、村塾に子弟が近づくことを喜びませんでした。家人には夜遊びのふりをして、秘かに出入りしたという高杉晋作のエピソードは、必ずしも珍しいものでなく、親族会議を開いて絶縁すると脅され、入門を断念した門田吉勝のような場合もあります。開塾早々は、当局の監視が厳しく、幽室への往来すらままならなかったといえますから、親たちの拒絶反応も当然でしょう。

一方、好奇心旺盛な若者たちには、海外密航という前代未聞の事件を起こした松陰は、常識ではとうてい計り知れない型破りの人物であり、一度その顔を見てみたい、会って話を聞いてみたいと思ったようです。親たちが忌避すればするほど、彼らは松陰という人物に興味を持ち、強い関心を募らせることになりました。なかには面白半分、怖いもの見たさにやって来た者もいます。その他、兵学門下生の関係で来た者、学塾の先生や先輩たちに勧められて来た者、先に入った友人知己に強く勧められて来た者もいます。

開塾間もない頃は、村塾への出入りを嫌う親たちが多かったという塾生の天野清三郎（渡辺嵩蔵）が、一方でまた、「当時は松陰先生の評判がよく、誰も彼も松下に行って居るといふやうで、云はば流行であった。又松下塾へ行けば何か仕事にありつけると思って居ったものだ」などというように、村塾で学べば藩の仕事につき、出世できるのではないかという世俗的な利益をあてにして来た者も、ごく少数ですがいます。塾の評判がよかったのは、増築工事が完成した安政五（1858）年の春から夏にかけての短い期間ですが、6月19日の日米修好通商条約の調印、井伊大老のいわゆる違勅事件をさかいに、松陰が過激な政治的主張を繰り返すようになると、事情は一変します。当局の取り締まりが、先生の言動だけでなく、村塾に出入りする塾生たちの身辺にも及ぶようになると、単なる評判、いわば流行でやって来た人びとは、早々に姿を消し、二度と現われませんでした。

(11) どのような教師であったのか

門人たちの先生評に、「温恭篤敬、言笑を苟くせず、而して門生を率いること懇切を極めぬ」とあるように、授業中の淡窓は謹厳そのもの、威厳に満ちた、どちらかといえば怖い先生でしたが、放課後は一転、周囲の誰に対しても、いつも温顔を絶やさず、万事に穏やかで親切な人であったといえます。

生来、温厚で人と争うことを好まない性格のためか、淡窓は、塾生が何か不都合なことをしても、大ていの出来事には目をつぶり、またストレートに反応したことはありません。たとえ間違いや過ちがあっても、面と向かって激しく責め、大声で叱るようなことはしません。相手の立場や感情の赴くところを考え、順序を踏みながら少しずつ分からせようとはしました。回りくどいといえば、これ以上ない手法ですが、淡窓にとって、じっくり時間をかけて問題に取り組み、手間暇かけて解決する、しかも、そのさい、言葉や理屈に頼るのではなく、できるだけ内面の良心に訴える、いわば徳化を何より優れたやり方であると信じていました。

肖像画の穏やかで君子風の外見とはうらはらに、松陰は感情の起伏が激しく、喜怒哀楽のはっきりした、理性よりもむしろ情緒の勝った人物であったようです。人に接するのに極めて穏やか、決して極端なもの言い方をせず、面白いこともいわず、しごくおとなしい人であったと弟子たちに見られた松陰は、一方でまた、東北脱藩行や下田踏海のような大胆不敵な行動をあえてする、直情径行の人でした。普段は物静かで優しいタイプだけに、一旦激すると、その変化は想像を絶するほど極端でした。授業中、教材に触発され興奮して溢れ落ちる涙で本を濡らすかと思えば、突然大声を発して、怒髪天をつく勢いで怒り出すなど、感情の起伏が激しく、それをまた、少しも隠そうとしていません。いつも歯に衣着せぬ言い方で、極端に褒めるかと思えば、また極端に罵っています。誰に対しても単純率直に接した、赤ん坊がそのまま大きくなったような天真爛漫の人でした。

(12) 二つの塾に共通するもの

①教師自らがやってみせる

咸宜園の卒業生たちがすぐに先生になり、教えたがることを憂える淡窓は、弟子の行状はその師に似るものであり、人の師になろうとすれば、まず自らが学問を修めるだけでなく、絶えず徳を高め人格を磨いて、弟子たちの模範になるようにしなければならない。学問が少しできる、知識や技術が優れているから、師となり教えようとするのは、あたかも未熟な医者が人の命を預かるようなもので、危険きわまりないと批判します。むろん、そのような淡窓自身、学問、道徳いずれの面でもなお未熟であり、人格完成にはほど遠いことを謙虚に認めています。欠陥だらけ、万事に未熟な自分であるがゆえに、日々反省の念を新たにして、研鑽に努めなければならないというわけです。十数年の歳月をかけてようやく達成した「万善簿」（日々の生活の中で徳を積み善事を重ね一万善に至る）への挑戦を何度も繰り返し、懸命に頑張る姿勢を終生貫いた理由でもあります。

孟子の「人の患は、好んで人の師となるに在り」を評して、「学をなすの要は己が為めにするにあり」「己が為めにするの学は、人の師となるを好むに非ずして自ら人の師となるべし。人の為めにするの学は、人の師とならんと慾すれども遂に師となるに足らず」などというように、松陰は、少し学問ができるようになるとすぐ教えたがる、安易に人の師となる世間一般の風潮を厳しく批判します。いかに頭がよく学問が立派にできたとしても、単なる博学、物知りに人を教える資格などない。本当に人の師となろうとすれば、ただひたすら、「己れを修め、実を尽くし、言語を容易にせず、実行を以て自ら責任」とする。何よりもまず、教師自身が立派な人にならなければならない。そのために、いくら口で上手に説明しても効果はなく、黙って実行してみせるほかはない。要するに、松陰にとって、教えるということは、教師その人がお手本を示し、自らが正しいと信ずるところ、理想とする生き様を弟子たちの前にさらけ出して見せる。その意味では何も教えない、何かを教えるというより、無為にして化すやり方でした。「義卿（松陰）が崛起の人」となる、「一人にても遣る」と叫び、自ら進んで死地へ赴いた、最晩年の松陰の姿をほうふつとさせます。

②学習者中心、学ぶ自由

幕府昌平校や諸藩藩校などの官・公立学校では、中級以上のサムライの子弟が何歳で入学し、何年間在学し、何をどう学ぶか、すべて上から決められており、学習者各人に選択の余地はありませんでした。一方、民間在野の私塾では、入学から卒業まで、学習カリキュラムのすべてが、塾生各人の意思、選択によって決まりました。さまざまな点で違いすぎる、ほとんど対極に位置するかに見える咸宜園と松下村塾でも、この一点に関しては、まったく異なるところがありません。学に志し、笈を負うて故郷を出た若者たちが、数多くの学塾の中から淡窓と松陰、いずれの先生を選び、いつ、どのような勉強を始めるか、すべて学習者本人の意思、自由な選択に委ねられていました。誰に強制され、どこから押し付けられたわけでもなく、各人の自由な意思で入学し、納得のいくまで勉強に励んだのです。

(13) 結びに代えて

インディアナ大学のR. ルビンジャー教授は、「私塾 Shijuku」と題する本に、「近代日本を拓いたプライベート・アカデミー」というサブ・タイトルをつけていますが、咸宜園と松下村塾、二つの学塾が、近世期日本にあった何千にも及ぶ多種多様な私塾の代表的存在であり、近代日本を担う有為の人材を多数輩出した、ルビンジャー教授のいわゆる「人材の重要なエスカレーター」「新しい職業分野のための人材のプール」であったことに、誰も異存はないでしょう。

すでに繰り返し見たように、松下村塾は僅か三年足らずの短期間で活動を停止し、その間、たかだか90余人の門下生を擁したのに比べ、咸宜園は、創立者の淡窓に続く9人の塾主に次々に受け継がれ、実に90余年の長きにわたり存続し、全国各地、60余カ国から5000人近い塾生を集めております。

松陰亡きあと、村塾は事実上閉鎖を余儀なくされました。松陰先生の代わりは誰にもできず、その教育を再現することなど、とうてい不可能であったからです。代理不可能、一回かぎりの村塾の教育に比べ、月旦評システムを確立した咸宜園は、淡窓先生がいなくなっても、後継の教師たちの手で立派に受け継がれ、多くの優れた人材を世に送り出しました。

二つの学塾の果たした役割は必ずしも同じでなく、その評価もプラス、マイナス、さまざまに分かれるところですが、一つだけ、間違いなくいえるのは、明治五（1872）年8月の「学制」頒布に象徴される教育の近代化路線は、ある日、突然外から持ち込まれた、欧米先進諸国の教育の移入・模倣などではなく、咸宜園や松下村塾に代表される近世期日本の私塾によって早くから着々と準備されてきた、新しい学校の体制や教育の仕組みは、そうした教育史的背景を直接・間接に踏まえながら、着実に大きな成果に結びついていったということでしょう。

嚶鳴フォーラム in ひた 記念講演会

「卒寿を迎えて今、廣瀬淡窓に魅せられたわけ」

童門 冬二◎作家



せっかくの土曜日を押し、たくさんの皆様にお時間をお割き頂きました。お礼を申し上げます。

私は10月19日に卒寿を迎えまして、満90歳になります。それをおもんばかっていただき、疲れたら座ってもいいよと椅子もしつらえていただきました。なるべく立ってお話をさせていただきますが、日田市さんの敬老精神の高さに胸を温めております。

私は東京都庁に30年ほどいまして51歳の時にやめました。そのころから地方自治についていろいろお教えを頂き、尊敬していた方が、元大分県知事の平松守彦さんであります。

平松先生は在職中に一村一品運動を起こされましたが、その時に一つの主張をなさいました。それは、たとえば、姫島で車エビを育てるにしても、シイタケをつくるにしても、カボスをつくるにしても、“グローカリズム”という考えを持ってほし

いということでもあります。

“グローカリズム”というのは平松さんがつくられた言葉であります。 “グローバル”と“ローカル”の合成語でございます。幕末に佐久間象山も同じことを言っておりますが、平松さんのお考えの中には、例えば、エビ1匹を育てるにしても、カボスを育てるにしても、あるいはシイタケの養殖をするにしても、認識として、大分県民であることをまず頭に置いてほしい。つまり、地方人であるということに頭に置いて欲しいということですね。

しかし、併せて、日本国民であるという意識も持ってほしい。そして、さらに、今の時代でございますから、国際人であるという認識を持ってほしい。その三つの人格の持ち主として、いろいろ起こる社会現象に対応してほしいということです。

そのためにはやはり、意識改革が必要だということで、地域に「豊の国づくり塾」という塾を設けられました。私も何回かお邪魔したことがございますが、つまり、意識改革をやりながら名産品をつくってほしいということだったんだらうと思うんです。

私が廣瀬淡窓先生に関心を持ちましたのも、実を言えば、地方自治との関わりにおいてです。そういう視点、角度からの今日の話でございます。その辺をお許し頂きたいと思えます。

言ってみれば、私が冒頭陳述のようなものをやるわけでございます。私は落語が好きでございます。落語には枕というのがございましてね。枕から本題に入ることですが、その意味ではこれからの話は枕でございます。真打ちは、後ほど登場される吉田公平先生と後藤宗俊先生の、淡窓先生を御研究になっておられる方のお話でございます。

お二人の対談には、私も冒頭に参加させていただきますが、それは、これからお話しする冒頭陳述に対するお叱りというか、バッシング（批判）をいただくだけのことでございますので、お叱りが済んだらすぐ飛行機に乗らせて頂くということで、お許しを頂きます。

■天領日田の商家に生まれて

江戸時代以前の制度ということで、平松さんがこういうお話をされたことがございました。一つは、明治4年に廃藩置県が行なわれて以降、日本は都道府県制度になっておりますが、これを逆にしたい。“廃県置藩”、つまり今

の都道府県制度をやめて、江戸時代の藩制度にしたらどうかということでもあります。

これは誰もが感じていたことかもしれませんが、今の自治体は3割自治と言われます。つまり、3割の自主性しか保ち得ない。7割というのは、やはり中央政府指示とか意向によるんだということでもあります。特に、財政面においてそういう傾向が強んだということでもあります。

ですから、江戸時代の藩、大名家でございますが、その制度のほうがはるかに自主性が高かったということでもあります。

それから、また、昔は九州に大宰府というのが置かれていまして、九州の問題は、大体大宰府に行けば片がつくということなんですね。今はほとんどが東京の各省庁を巡らなければ片がつかない。そこで、九州府という新しい組織にして、中央政府の次官級の人を置いて、そこである程度のものが決裁されるようにするのがよいということをおっしゃっていました。一種のアイロニーではありますが、私は非常に関心を持ってその説を捉えていたわけですが、やや江戸時代の日田のありようと似ているかなという気が致します。

日田には、九州の天領のまとめ、あるいは、支配として役所が置かれました。日田代官所でございます。日田代官の権能というのは、徳川幕府のために、主に年貢、税金を管理する仕事を負っておりました。

もちろん、裁判やその他の行政も行ないます。平均して15万石ぐらいの財政を扱っていました。大名というのは1万石以上ですので、中級の大名ぐらいの権限を持っていたということでもあります。

代官というのは江戸城から来た旗本が担当しておりまして、歴史をたどってみますと、羽倉簡堂のお父さんとか、あるいは、幕末の川路聖謨のお父さんとか、名代官がたくさん出ているわけでございます。

その中であって、淡窓さんの家は商人でございました。ただ、淡窓先生は体が非常に弱かった。そして、また、視力がだんだん弱っていくというような病状でありました。

ある時、自分の都合もありましたが、お父さんが、おまえは体の弱い身だから、いっそのこと、家職、家業を弟の久兵衛に譲りなさい。そして、思う存分学問の道に励んだらどうかという温かいことを言ってくれました。

淡窓先生はそれに従ったわけでもあります。しかし、23歳ぐらいになって、どうも不安定なんですね。御自身の立場というか、身の置きどころが。そこで、熊本のほうへ行っておられました。日田出身の倉重湊さんというお医者さんがおりまして、この方が常に淡窓先生の診療に当たってくれていたわけで、その湊先生に手紙を出しました。自分の立場を正直に告げて、知恵を貸してほしいという手紙であります。内容は、「23歳にもなって体が悪いために、まだ親の厄介者だ。本来は、長男だから、家を継がなきゃいけないんだけど、それができない。そこで、弟の久兵衛に一切を任せている。非常に心苦しい。毎日本ばかり読んでいる身であって、何とかして自活の道をたどりたい。それには、技術を学んで、お医者さんになることが手っ取り早い独立の道ではないかと思う。この辺をどう思うか、一つ御助言を乞いたい」ということでもあります。

ところが、湊先生から返事が来ない。結局、思い余って先生を訪ねたわけです。湊先生に聞きました。

「この間お手紙を差し上げたんですけど、読んで頂けたでしょうか」

「読んだ」

「御返事を頂けないんですけれど」

「ばかばかしいから、おまえの手紙は捨てちゃった」

「どうしてお捨てになったんですか」

「おまえは甘えん坊だ。独立したいと言いながら、根性が全くない。依然として親がかりだ。本当はおまえが継がなきゃいけない家業も、弟の久兵衛にみんな任せている。結局、親がかり、弟がかりで暮らしている。その根性を叩き直さなければ、幾らわしがこういう道をたどったらどうかと言ってもだめだ。だから、愚痴ばかり書いてある手紙なので、破って捨てた。ただ、一言だけ俺の考えを言えば、おまえさんは、学者というよりも、むしろ教育者に向いている。人を育てる適性を持っている。それが恐らく天の命じたおまえさんの仕事ではないのか。そういう強力な武器を持ちながら、なぜ教育者、人を育てる仕事につかないんだ」

ということです。はっきり言えば、そのことを自分で発見するまで黙っていようと思っていたけれど、訪ねてきたから言ってあげよう。教育者になりなさい。それには親がかりではだめだ。自立して、生活の面も、つまり、お金の調達も自分でやりなさい。崖っぷちに身を置かなければ恐らくだめだよということなんですね。

湊さんの助言によって、淡窓先生が初めて、そうか。学問を学んで学者になろうと思っていたけれども、学問がこの世に役立つためには、やはりそれを継いでくれる人を育てることが大事なんだと気づくわけですね。その後もいろんな経過がありますが、やがて咸宜園というのをつくるわけでもありますね。

■「三奪」と「月旦評」で、完全平等な学問社会を実現

やがて、淡窓先生の名前が知れ渡っていきます。江戸時代は旅というのが厳禁されていましたが、三つの研究と
いうか、修行のためには旅が認められておりました。

一つは武術。いわゆる剣術とかそういうものの修行ですね。二つ目は学問の修行であります。三つ目は宗教。お
伊勢参りとか、いろんな神社、仏閣を訪ねる。この三つには、幕府が、切手と言いまして、パスポートを出してく
れるわけでありませう。

ただ、私の無責任な考えであります。当時の学者間では、割合にフリーに情報の交流とかヒントの与え方が行
なわれていたのかなと思います。

例えば、嚶鳴フォーラムのもとになりました東海市出身の江戸時代の学者で、細井平洲という先生がおられます。
同じ時代に、熊本には細川家に仕える学者で秋山玉山という学者がおられる。恐らくこの2人は“ポン友”であり
ますから、細川家で行なわれている藩政改革の内容——細川家には重賢という名君がおり、米沢の上杉鷹山よりも
先に藩政改革に手をつけていたわけですが——その中身だとか考え方、あるいは、ポリシーとか発想が、恐らく、
秋山さんを通じて細井先生にも伝わっていたと思うんです。

このような学者間における情報の交流、あるいは、ヒントの与え方というのは、割合大らかに行なわれていた。つ
まり、世の中のため、あるいは、住んでいる人のためになれば、いわゆる、パテントとかオリジナリティとい
うか、そんなものを主張して、あれは俺のところから盗んだなんて、そんなせこい話をしないんですよ。

そういうような交流がありますから、廣瀬淡窓先生のいろんな教え方とか伝え方というの、口コミで諸国に伝
わっていく。結果、3,000人から4,000人の門人が来たと言われておりますね。

ただ、淡窓先生は、咸宜園の入門者に有名な「三奪」という資格を設けました。三つのことを、奪うということです。

問題は、何を奪うのかということでありませう。一つは年齢であります。年を忘れろと。二つ目は学歴であります。
いつどこでどういう先生にどういうことを習ったのか。過去に学んだことは全部忘れちまえと。それから、三つ目
は身分であります。社会的立場だとか、家柄だとか、あるいは、ポストがどうだとか、そんなことはみんな捨てろと。

この奪うというところに私は意味があったのかなと思います。この場合の、奪うというのは何だということ、自分
自身でその三つを奪えということですね。むしり取れということ。単に忘れろということではなくて、とことん根っ
こまでそれを取って捨てろということでしょうね。

言葉をかえて言えば自己改革をまずやれということです。年齢だとか学歴だとか身分だとか、そういうような
ものを捨て去ってしまい、いわゆる、本当の生(なま)の、ありのままの人間になって門に入ってきなさいとい
うことでしょうね。

学問の世界も一つの競争社会であります。しかし、咸宜園では悪平等な教育はしない。そのために、月旦評とい
つて、月に1度、勉学の成果を評価する。それによって、咸宜園塾内のランク付けを決めるんだということですね。

だから、月旦評によってランクが変わると、咸宜園内における地位も移動するわけですね。トップに立っていた人
が、次は最下位になったり、あるいは、逆に最下位の人が今度は上のほうに立つとか…。咸宜園は、三奪によって
自由な立場に立った人たちが学び、月旦評によってランク付けされるという、完全平等の学問社会だったわけ
ですね。

私も完全に研究したわけではないので、それほど大きな口はきけないんですが、廣瀬淡窓先生は、日記とか記録
は克明におつけになって残されていますが、例えば、岩波の日本思想体系に入るような学説書というんでしょうか、
そういうものは余り残されておられないような気がします。

それは、淡窓先生が、湊先生というお医者さんの助言により、人育て、教育者としての本分を尽くされた結果で
はないかと思ひます。淡窓先生が日々口にされる言葉、あるいは、行ないを塾生たちが即実践に移すことが淡窓先
生の学説の主張であつて、つまり、そういうものをつづっていけば、1冊の本という学説になるというようなこ
とだったのかなと思ひておひます。

■学問には、「意」と「情」が大切

結局、咸宜園では、三奪を基本にして、月旦評というものを行なつたわけでありませうが、さっき申し上げたよ
うに、このことが学問の世界の自由さによって口コミであちこちに伝わるわけでありませう。形態としては、長州の吉
田松陰が開いた松下村塾の教育方法もかなり似たところがあるので、あるいは、松陰も影響を受けていたのでは
ないかという思ひもします。

ところが、昨日ですが、吉田先生や後藤先生に、吉田松陰には余り深い影響はなかつたのではなかつたらうか、むし

ろ、大坂の緒方洪庵が開いた適塾のほうに自由教育の傾向が色濃くあらわれているのではなからうかというお教えを頂きまして、それはそうかもしれないなという気もしました。

両先生には、のちほどバッシングを受けるかもしれませんが、適塾の緒方洪庵というのも学生の討論、いわゆる対話を重視しています。これは吉田松陰も同じでありました。さらに松陰は、日本中を歩き回っています。

つい先日、青森の弘前に参りました。弘前城の堀の隣に道標が立っているんですね。吉田松陰先生、ここを訪ねてこられた跡だと。だから、九州はもちろんのこと、北海道までは行ってないんですが、青森県のここまで歩いたのはすごいなという気持ちになりました。その松陰は、僕は君たちの師ではない、同じ学僕なんだ。だから、君たちは僕の学友だと思っていると言っています。そして、日本中を遍歴した時の印象をつづって一つのメモ帳をつくりまして、「飛耳長目」と名づけました。耳を飛ばし、目を横に長く開くという意味です。小田実さんが言っていた、何でも見てやろう精神、好奇心のあらわれでございますね。

結局、これを松下村塾の机の上に置いて、門人たちに、そこに書いてある中から自在に題材を選び、まず、自分の考えをまとめなさいと指導しました。なぜこういうことが起こったのか。予防はできなかったのか。防止策はあるのか、ないのか。あるいは、起こってしまったことはどうすれば解決できるのかというようなプロセスで、自分の考えを書きなさいと。

この考え方は、昨日、吉田先生と後藤先生にお教えを受けてはと思ったのですが、適塾で学んだ福沢諭吉が、慶應義塾でやっていたことと同じですね。

社会問題をテーマにして、自分の考えをまとめなさい。それを書面にしなさい。文字で書きなさい。そして、でき上がった論文は、まず、例えば、昨日、遠い田舎から出てきたばかりの若い女性、ほとんど体系的な学問を学んでいないような人に読んでもらいなさい。その人が、書生さん、これはいいことが書いてありますねと共感の意を表するようなら、そこで一次的にはパスなんだ。その上で次に、同門の人たちに発表しなさい。議論をしなさい。そして、どうしても結論が出ない時には僕に相談しなさい。

これが松陰なり福沢諭吉の、あるいは、緒方洪庵の教育方法でございますね。

咸宜園にもそういう特性があって、かなりシビアな、こういうルールというものが守られておりましたね。

そして、園内の仕事ですね。食事の支度だとか、清掃だとか、あるいは、部屋の管理とか、こういうものを全部、月旦評による仕分けによって割り当てるわけでありまして。一番成績が悪かった者は下足番、つまり、履物の管理を行いなさいと。こういうものがあるわけでありまして。

淡窓先生は、学問には「意」と「情」の二つがあると考えていました。「意」というのは、「知」のこと、インテリジェンスだろうと思います。ですから、これは、学術論文や学問の体系化、あるいは、論文化を行なうということです。

しかし、学問というのは、どちらかといえば、このインテリジェンス、知のほうの働きと営みであるために「情」を忘れがちだと、淡窓先生は考えておられたと思います。人間というのは情というものを忘れることはできない。喜怒哀楽というものは自然に湧いてくるのであって、この面が捨象されるということは普通あり得ない。だから、この情のほうにも目を向ける必要がある。そして、それを実際に文章として表現したのが、詩、つまりポエムなんだということをおっしゃっていますね。

淡窓先生は、この詩のほうに非常に重点を置かれています。だから、おびたしい漢詩をおつくりになっているわけでありまして。その淡窓先生が幼少の頃に作った詩を、ある時、何かで目にされた細井平洲先生が、すごい詩だ。子供の時から天才か、鬼才を持っている人のつくった詩だねと、激賞されたという記録も残っています。

咸宜園にも実際に訪ねてきた寛政の三奇人の一人であります高山彦九郎さんも、淡窓先生の詩を読んだだけで鬼才だとわかると、同じことを言っています。そういう才能が淡窓先生にあったことは事実であります。咸宜園の教育においても、詩作を非常に重視されていたわけでありまして。

僕がさらに感動しますのは、病弱のせいもありますが、淡窓先生は、ほとんどこの地から動かれていない。そして、いわゆる、来る者を拒まず、去る者は追わずという態度で、何千人もの門人の心そだて、人そだてをなさったということでありまして。

全くの余談ですが、宗教で言うと、私は法然さんを思い出しますね。法然上人もほとんど京都の黒谷から動いてないんです。あそこにどっしりと腰を据えたまま、訪ねてくる信者たちの悩みや苦しみを聞いて、それに的確な対応をしていった。こんなことを言うと、また後で両先生のバッシングを受けるかと思いますが、淡窓先生もそういうようなことをしておられたのではないかと思います。

■塩谷代官と淡窓先生

ただ、私のテーマであります地方自治という観点から考えると、どうしても避けることのできない問題が起りました。

それはどういうことか。大分県には、幾つかの小さな藩、大名家と幕府の直轄地、要するに天領ですね。こういう土地がございましたね。

日田天領水というペットボトルに入った水がございましょう。僕も飲んでいるんですが、初めは、そろそろこんな年ですから、自分にけりをつけよう、末期の水にしようと思って飲んでいたんですよ。ところが、末期の水が逆に健康水になっちゃいまして、こういうふうになっちゃった。だから、末期どころか、もう少しこの世にお邪魔しなきゃいけないという、こういう体たらくになりましたが。

それはそれとして、天領というのは、恐らく、これは天下人の領地、あるいは、天下の領地とか、こういう意味合いかなと思っております。大空の意味じゃないでしょうね。江戸時代には、全国に400万石以上の天領があったようです。そのために、幕府は、各地に代官所を置いて、代官というものを任命致しました。天領というのは日本各地に散らばっておりますから、代官所があちこちにある。代官もたくさんいるんです。だけど、日田の代官所に勤務した人は、ほとんどが名代官であった。後に幕府のほうに栄転をして、要職についております。そういう出世コースだったわけですね。

ちょうど咸宜園が開かれた年の二、三カ月前でしょうか、ここに塩谷大四郎という人が赴任致しました。

御当地の方は御案内だと思いますが、塩谷代官がやった業績に対して住民が非常に感動しまして、幾つかの顕彰碑、碑をもってこの人をしのぶとか、功績をたたえていますね。その意味では、名代官だったんだろうと思います。

ただ、代官というのは、徳川家のための土地管理が主務であります。結局は、ここに骨を埋めて、死ぬまで代官を続けるというよりも、功績を立てて、江戸城へ帰る。こういうような気持ちがないとは言えなかったらと思います。ところが、塩谷代官には初めはそういうものがなかった。むしろ、ここ日田のために、日田に住む人のために、今でいう、インフラ、基盤整備をやろうということですね。道路を整備する、あるいは、河川を改修する。そして、その河川には、水運というんですか、舟による物流ルートを設定する。そして、最後には干拓ですね。水のあるところを埋めて、新しい田んぼをつくるとか、こういうことをしました。

私個人の印象では、徳川幕府というのは、本来的には、徳川家を存続させるための政府であって、日本全体を考えた仕事とか、あるいは、国民のことなどほとんど意識になかったらと思います。市民の存在を初めて意識し、課題にしていったのは8代将軍徳川吉宗あたりが最初だと思うんですね。吉宗は、名奉行と言われた大岡越前守忠相を使いながら、最初につくったのが投書箱ですね。これによって市民の意見を聞いて、それを政策に活かすべきものはどんどん実行していく。その一つとして、小石川に老人のための福祉センターをつくる。小石川養生所と言います。これが明治維新まで残りまして、その後、東京市に引き継がれ、現在は東京都の老人福祉センターにまで発展しているわけでありまして、そのころが初めてじゃないかな。それまでは、政治の中に市民という意識はない。もっとも、吉宗も「徳川ファースト」であったことは間違いありません。徳川を守るためには、市民を意識しなければいけないということに気付いたということですよ。

塩谷さんが一生懸命なされたインフラというの、あるいは、水田の設定も、基本的には、徳川家の幕府の収入を増やそうという意図だったと思います。

しかし、そのことが住んでいる農民たちに一種の可処分所得をもたらしますし、都市環境がよくなればそれだけ住んでいる人も利便を得るわけですから、決して悪くは思われなかった。

ただ、塩谷さんは、淡窓先生を代官所の用人格に任命しちゃったわけでありまして。用人格というのは、平松さんの言葉を借りるなら、九州府における、あるいは、古代の大宰府における次官級のポストですよ。

代官所が、淡窓を用人に任命をしたということは、咸宜園の教育制度が非常に優れているので、代官所役人の研修や住民への意識改革のための講習を咸宜園で行なって欲しい、それによって、もっと責任を持った役人や住民になってもらいたいということだったと思うのですよね。その意味では、咸宜園を丸ごと抱き込んでおおうという政策だろうと思うんですね。代官所は、徳川幕府の日田支所、日田支社みたいなものです。そこの責任者である代官がそういうことをしたということは、一種の教育機関の国有化というか、中央集権化を目論んだことになるとも言えます。

結局、ここが非常に難しいところなんですね。つまり、塩谷さんの動機がそうであっても、住民に対しては、後に顕彰碑がつくられるほどの善政を行っていたとすると、抱き込みに会った淡窓先生も反対はしにくいんですよ。

さらに、弟の久兵衛さんがこれまた名商人でありまして、経営感覚が鋭い。金に困って赤字財政になっている九州近辺、北九州の各大家の財政再建に対しても、実際に実務を盛んに行っていた。廣瀬家は掛屋という代官所出入りの商人でありますから、代官所が集めてきたお金の保管をすることもあるんです。代官の塩谷さんはそれを1年無利子で預けておく。ところが、預かった方は、ある程度融通できるんですね。利子をとっても構いませんから、預かったお金を回すことで利益を得ることができるわけです。

ですから、塩谷代官の要請に対して、それは咸宜園の自治への侵害ですとむげに蹴ることができませんでした。そういう意味では、淡窓先生の立場は、非常につらかったなと思います。

淡窓先生と塩谷代官の関係も同じなんですね。淡窓先生が咸宜園に植えつけた自治の精神に対して、塩谷さんは、幕府という権力を背景にしながら、全部支配下に置こうとしたということでもあります。

結局、塩谷さんは非常に成績がよかったものですから、人事異動で西国郡代という上位職に栄転をしまして、結果的に咸宜園自体が確立していた自治が守り通せたわけでもあります。

その意味では、学問の自主性、自治というものを、健康を失っているにもかかわらず視力を尽くして守り抜いた淡窓先生の気力、あるいは、信念には、今でも通ずるものがあるのかなという気が致します。

最初に申しましたように、大分県の知事だった平松守彦さんは私が尊敬する方で色々教えていただきましたし、現在の広瀬知事にも色々お世話になっています。さらに、広瀬知事の御兄弟が東京のテレビ朝日の社長をやっておられました。その時、私はテレ朝の番組審議委員だったんですよ。ですから、兄弟ともにお世話になっていますし、今は、日田の天領水にも非常にお世話になっていますので、東京にいて、大分や日田には足を向けて寝られないなど、いつも思っています。

非常に断片的でございますが、既に次のプログラムの時間の中にかかなり食い入ったようでございますから、これで冒頭陳述を終わらせて頂きます。

童門というペンネームですが、せっかく土曜にこうしてお時間を割いてくださった皆さんに御参考になる話がでないんですよ。だから、初めに謝っておけばよかったんですが、それを飛ばしちゃったものですから、改めておわびを致します。本当に『『どうもん』すいませんでした』(拍手)

嚶鳴フォーラム in ひた

先哲に学ぶ — 歴史が現代に語りかけるものとは？



歴史小説作家 童門 冬二 氏
東洋大学名誉教授 吉田 公平 氏
別府大学名誉教授 後藤 宗俊 氏
コーディネーター 岡野 涼子 氏

■童門先生の記念講演を巡って



岡野涼子 それでは、これより、童門冬二先生、東洋大学名誉教授の吉田公平先生、咸宜園教育研究センター名誉館長の後藤宗俊先生による鼎談をさせていただきます。「先哲に学ぶ歴史が現代に語りかけるものとは」というテーマでお話をさせていただきます。宜しくお願い致します。

最初に、吉田先生、先ほどの講演を聞かれました御感想からお願い致します。

吉田公平 吉田でございます。毎回この嚶鳴フォーラムでは、童門先生のお話を伺うのを楽しみに、参加させて頂いております。

今日も、いかにも童門先生らしい視点でのお話だなあと聞かせていただきました。とくに心に残りなるほどなあと思ったのは、一つは、廣瀬淡窓先生が、学説というか、思想家としての評価に相当するような学術的な著書をまとめた形では残しておられないということです。

なぜかという、童門先生がおっしゃられましたように、教育というのは原理だけでは実践できないからです。大坂の適塾もそうですが、実学を志した場合、現場での実践をどのようにプログラムして学生諸君たちと切磋琢磨するかということが大切になります。要するに、現場のことを問題にした時には、原理的にはこうだという学説だけで放っておくわけにはいかないという切実感があるわけです。だから、淡窓先生は、自分は学説だけ説いてあとは学生まかせという役割は果たせないと、自覚的に学説を残されなかったのではないかと思います。

もう一つ、お話を伺って、童門先生に改めてお尋ねしたいと思ったのは、代官の塩谷大四郎が咸宜園を丸ごと抱き込もうとしたのではないかとという点です。

淡窓先生が、天領の中に抱き込まれてはたまらないということで、独立の宣言というのを、短い言葉、二つの漢字であらわしたのが、「敬天」——天を敬う——という言葉ではないかと僕は思いました。この場合の「天」というのは、天下人の天という意味じゃなくて、それを越えた普遍的なもので、天を敬うという視点で若い人たちを育てていくぞという淡窓先生の思いじゃなかったかなと、先生のお話を伺いながら感じた次第です。

後藤先生も御感想を述べられると思いますから、我々2人の感想を聞かれた後に、童門先生から教えて頂きたいと思います。

岡野 それでは、後藤先生、お願い致します。

後藤宗俊 童門先生がお話の中で、専門の先生方からバッシング（批判）を受けるかも知れないけれど、ということをおっしゃられました。逆に、長く淡窓先生や咸宜園のことに関わっている人間として、私の方こそ、先生からバッシングというお叱りを受けているような気持ちでお話をお伺いしていました。

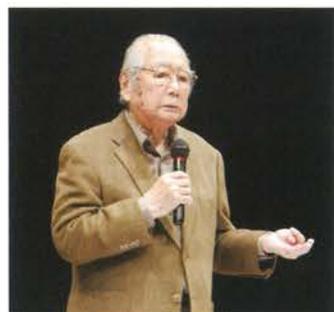
その中で、非常になるほどと思うこと幾つかございました。一つは塩谷大四郎代官のことです。咸宜園というと廣瀬淡窓がまず第一で、塩谷代官は咸宜園にいろいろ細かいことで干渉してきたという流れのなかで出てきます。

一方で、弟の廣瀬久兵衛さんの方は、代官所から非常に厚い信任を得ていました。だから、廣瀬久兵衛の研究と淡窓の研究が、どうしても別々の研究になっちゃうんですね。

ところが、童門先生のお話を伺いながら、塩谷代官という一つの軸を置いてみると非常にわかりやすいのではないかと思います。頭の中で塩谷代官を頂点に三角形を描いてみました。すると、塩谷代官と廣瀬久兵衛さんは、インフラ整備とか地域開発とかいうところでつながる。一方の淡窓さんと塩谷代官は、塩谷代官が持っている文化に対する強烈な考え方でつながる。そして、当然ですが、久兵衛さんと廣瀬淡窓さんは廣瀬家・咸宜園ということにつながっている。そういうふうにして捉えてみると、あの時代の日田のことがよくわかるかな。この三角形を回転させると、淡窓が頭に来るし、久兵衛も頭にきます。そのようにくるくる回しながら、考えていくと色んなことが見えてくるのではないかと思います。

塩谷代官は、咸宜園がスタートした年に日田に来られて、18年間も代官として日田におられました。しかも、日田で成果を上げて偉くなって江戸に帰ろうというよりも、ここに腰を据えるつもりだったのかなと思うぐらいの方なので、そういった視点で、塩谷代官時代の久兵衛と淡窓ということで考えてみたらどうかと考えたわけです。

岡野 お二人の御意見というか御感想を聞かれて、童門先生、いかがでしょうか。



童門冬二 つたない話に、温かいご評価とお言葉をいただき、ありがとうございました。

吉田先生のおっしゃられた敬天ですが、これはおっしゃるとおりです。西郷隆盛も同じようなことを言っていますが、「天を敬う」というのは、当時の学者さんがみんな持っていた思想だろうと思いますので、それは御説のとおりだろうと思います。

それから、後藤先生が塩谷さんに対して、クールな、幕府の冷たい官僚だという捉え方ではなくて、地域密着型だという受けとめ方をして頂いたことは大変ありがたいと思います。私も彼には出世主義みたいなものは余り感じられないんですね。

むしろ、この地に善政を施していこうという、これは国家官僚として当然のことですが、本当は大名がやらなきゃいけないようなことを熱心にやられた方だなどという気が致しますので、御評価もうれしゅうございました。

お礼だけを申し上げて、“出獄”をお許し頂けますか。

岡野 先生方、よろしいですか。

童門 じゃあ、“刑期満了”ということで、とんずらさせて頂きたいと思います。

岡野 とんでもございません。飛行機のお時間があるということで、童門先生にはここでご退席して頂きます。皆様、盛大な拍手をお送りください。(拍手)

【童門冬二氏退席】

■一緒に学び、切磋琢磨しようという発想

岡野 それでは、ここからは、ここまでのお話を受けて、廣瀬淡窓の咸宜塾というか先哲たちの事績を、これからの教育、とくに若い人たちや地域づくりにどう活かしていけるのかという点に視点を置いてお話を伺っていきたいと思います。

それでは、最初に、吉田先生、お願い致します。

吉田 私は中国の近世哲学が研究の中心で、日本の近世も儒教を中心に考えてきたんですね。日本は17世紀の初頭から本格的に中国の近世哲学を学び始めたので、日本人自身の中国哲学理解というのは、傾向としてどうなんだろうかということの研究をしています。併せて、我が身を反省するためにも、江戸から大正期ぐらいまでの儒学者の研究もやっております。

廣瀬淡窓については、私はどうしても哲学的な関心がメインなものですから、本格的に研究したというより、僕の友人に廣瀬資料館の資料調査をメインにやっている人がいたものですから、彼に招かれて、あるいは、導かれて、

今回で8回目か9回目になりますが、日田にも来ました。そういう意味では、淡窓先生については、横目でちらっと見ながらという感じですが、彼の本流は教育だったんだと思います。

これは周知のことで、教育課程というか、実践記録というのが江戸期の私立学校の中では、咸宜園が一番丁寧に残っている施設ですね。咸宜園に次いでぐらいかもしれないほど残っているのは、兵庫県養父市の池田草庵の青谿書院です。だけど、青谿書院のほうは基礎研究がやっと始まったばかりなんですね。それに比べると、廣瀬淡窓や咸宜園についての研究は非常に整っているんですね。それに、人材もたくさん出ました。

人材がたくさん出ましたという時に、どうしても偉い人が出ましたと言いがちになるんですが、そうではなくして、私に言わせれば、咸宜園の一番の特色はよき市民をたくさん育てたということです。

そういう意味では、童門先生が触れられた吉田松陰の松下村塾とは非常に違います。松下村塾は、明治維新に大きな功績を上げた政治家をたくさん出したかもしれませんが、吉田松陰というのは、非常にバランスのとれていない困り者ですよ。松下村塾で学んだ人にも困り者が多い。山口県から出た総理大臣といったら、ほとんどが困り者です(笑)。

だからこそ、歴史的に大きな役割を果たす人材が排出したわけですが、その一方で、我々には、それぞれが一市民として社会に貢献しながら、共に幸せに生きたいという願望があります。そのための、学びというのを、廣瀬淡窓の咸宜園や、この嚶鳴フォーラムに参画している自治体ゆかりの儒学者と言われるような人たち、たとえば恵那市の佐藤一斎とか、東海市の細井平洲、養父市の池田草庵といった人たちが担ってきたんですね。

我々が社会を見る時に、社会性ということと、個人としての幸福ということの二つの側面があります。そして、その両方のバランスをとりながら、どちらに重点を置くかということになります。政治的な役割のほうにウエイトを置くというのが松下村塾だとすれば、廣瀬淡窓さんの方は、政治から完全に無縁な存在ということは難しいとしても、やはり一人一人がいかに生きるかという一番の原点のところを確認しながら、一緒に学び、切磋琢磨しようという発想なんですね。

そのような視点に立った時、僕の日から見て、今までの廣瀬淡窓研究で余り本格的に論じられていないのは、廣瀬淡窓さんがなぜあれほどまでの教育を、ぶれないで実践できたかということです。それは、やっぱり儒学を学んだからだと思います。

儒学の一番の根底にあるのは、誰もが社会的な役割を応分にというか、それなりの役割で果たすんだということと、もう一つは、誰もがそういう役割を果たす可能性を持っている、すなわち、一人一人がみんな幸福になれるものを持ち合わせてこの世に命を頂いているんですよという人間観です。これを平たい言葉で言うと、「性善説」と言います。人は、他者とともにお互いに幸せになるように努力する力が、生まれながらにしてあるんだということです。

そのような信頼がないと、あれだけの教育にはならない。淡窓さんはそのような根底的な人間観を持っていたと思うんですね。人間は、ほっておけば悪いことをするに違いないから、法律で縛って、罰して、悪いことをさせない。その結果、社会の秩序を保つぞという、いわば法一本主義とか、あるいは、政治的な権力で規制するという発想が、廣瀬淡窓さんにはないんですよ。だから、学びに来た一人一人の個性を尊重しながら、自由平等というか、多分大丈夫だろうということで塾生たちに接していた。

「誰もが本当にそういう力を持って生まれているんだと、命を頂いているんだ」ということは、はっきりと照明できないことなんです。しかし、その証明できないところを出発点に置いて、ぶれないで生涯、それを貫き続けた人が淡窓さんだという視点ですね。そこが見えると淡窓さんはわかりやすい。

だけど、淡窓さんは、そういう正義を、あからさまに原理的な学説として言っていない。だから、見えにくいんですが、見えにくいといっても、実践記録を見たら、そのことがはっきりとわかります。人間を根本のところでは信頼しないという不信感、たとえば、罪を犯した人がいるとすると、それを人間の本質だと見るのか、あるいは後天的なしわざのためにああいうことをしてしまったので、これは直せる可能性がある。ひょっとすると罪を犯さなかった可能性もあると見るのかという、人間理解の一番の原点のところですね。その原点を、淡窓さんは「性善説」に置いたんだと思います。

もちろん、警察制度というか、罪を罰する制度も必要です。だけど、人間らしく生きる可能性を誰もが持ち合わせているんだというベーシックなところでの腹構えがないと、教育や市政に携わっていても、みんなと一緒に生きていくという元気は出にくいんじゃないかなと思います。

そういう意味では、廣瀬淡窓という人は、典型的な性善説の信奉者だったというのが私の理解です。学説としての性善説を淡窓さんは述べていませんが、実践記録を見ても、昨日、いただいた後藤先生の御本を拝見しても、ともに学ぶ、若い人に対する信頼感が基礎にあるのは間違いない。その性善説を根底に、みんなと共に楽しく生きた人なんだと思います。

岡野 ありがとうございます。後藤先生、いかがでしょうか。

■淡窓、久兵衛、塩谷代官を三角形でつないでみると…



後藤 先生に差し上げた本の中にも書いてありますし、講座なんかでいつも言っているんですが、咸宜園の塾舎の中では、勉強するということと同時に、休み、“放学”と言うんですが、とにかく休みの日を大事にしました。

淡窓先生は、その休みの日に、「遊山」と言うんですが、日田の美しい景色の周りに生徒を連れ出して一日過ごすということを繰り返しているんですね。

塾生たちの年齢はまちまちだし、お医者さんもいれば、僧侶もいる。侍もいる。農民もいる。そういう混成集団で野山を歩き回る。そして、必ず鎮守のお宮に行つて、そこでお弁当を開く…。そういうことがずっと行なわれていますから、地域の住民の方でも、「あっ、来た来た、咸宜園の人たちが来た」ということになる。そういう意味で、日田の風土といいますか、そういったものをしっかりと咸宜園の教育の中に取り込んでいます。

遠いところから来た塾生たちが塾舎の中で勉強したことも大きな糧になっていくわけですが、そういう野山を、身分や年齢を超えたメンバーが集まって先生と一緒に歩いて、しかもそれを地域の人たちが温かく見ているというのは、大変な体験だったんじゃないかと思います。

そして国に帰った後、このことが口コミで伝わった。つまり、淡窓先生というよりも、日田へ行ってこいというような形になったのではないかということの特に思います。確かに淡窓先生はいろいろ学説を立ててということは幾つかやっていますが、徹底的に学者として学説を立てるといのは先生の本心ではないんですね。

先ほどの童門先生のお話の中にあつた「三奪の法」というのは、年齢、学歴、身分を全部奪うということで、私たちが今まで淡窓先生が、咸宜園に入ってくる人からこの三つを奪うということ、ずっと言ってきたんですが、童門先生が、それは「捨てる」という意味だとおっしゃったことに、あつと思いました。「捨てる」と。「来る時にこれだけは捨てる」ということを言っていたんだと。そのことをなるほどと思ったんですが、実際にも、咸宜園の入門者は、みんなこれを捨ててきていると思いますね。

特に、日田でいいますと、代官所の役人さんが数十人咸宜園に入っているんです。その人たちの成績も実際に月旦評に出ますから、代官が、これをもうちょっと上げるとか、そういう細かいことについて咸宜園に指摘する、モニターペアレントみたいなことをやっています。それが淡窓先生が言う「官府の難」、役所から難儀が来るということですが、肝心の入門した学生たちは三奪を受け入れているんですね。

咸宜園では、代官所の侍も、全国から来た農民も僧侶も塾舎で合宿していました。そうして一緒に勉強してみると、あれは町人だけれどもすごいとか、この人は誰だろうと職業を聞いたら農民だった、といったようなことを侍たちも経験するわけですね。だから侍たちも、三奪を受け入れていたと思うんです。そうでなかったら、こんな制度は長く続きません。それ以前に、侍なんかは入ってきません。身分を取るぞと言われてたら、そんなことならもういかんということになります。

この三奪の法と月旦評という実力本位の教育を徹底するということは、90年間の咸宜園の歴史の中で、最大の特徴になっています。

だから、廣瀬淡窓先生は、声高に主義主張を述べてはいないけれども、基本のところでは物すごいことをやっている。代官所のお膝元、歩いて10分のところでそういうことをやっているのです。

確かに、塩谷代官は、咸宜園に対して様々に干渉していますが、決して咸宜園を潰そうとはしていません。三奪の法に対しても、こんなのは幕府の掟にかなわないから捨てるということは言っていない。だから、塩谷代官が帰つてからもそれは咸宜園の塾是として残っていくということになったと思いますね。

■生きるということは、学ぶということ

岡野 これまでのお話で、咸宜園を通して、日田全体だったり地域全体のことが見えてくるというのが非常にわかつたんですが、最後の質問になってしまいました。

吉田先生、ふだん、東洋大学でもそうですが、いろんなところで学生と関わりながら、教育に携わる中で、淡窓の教えというか、先哲の教えをどんなふうを活かして、そして、人づくり、地域づくりを行なっていけばよいのかを教えてください。

吉田 教育そのものには、小学校、中学校、大学まで含めて、制度の中で行なわれる教育というものが確かにある



んですね。

だけど、市民の皆さん方が実際には行なっていると思うんですが、制度の外で各人が自由に教え合い、学び合う場というものを、もっと自覚してやっていくというのも一つの手かなと思います。

咸宜園は、藩校でも天領の学校でもなくて、今風にいったら私立大学ですよ。当時の私立大学は武士でない者が主宰するんですね。養父の池田草庵もそうです。近江聖人と言われた中江藤樹などは、侍の身分を捨てて教育に専念するんですね。

今日御来場の皆さんの中には教育に直接携わっている人もおられるでしょうが、それは制度の中の役割ということです。そうではなく、市民同士で教え合うという

か、学び合うというサークルが日田にもあると思いますが、そういったものに大きな意味があるんだと思います。廣瀬淡窓さんは余りにも偉大だから、淡窓さんや咸宜園のことをマネをするわけにはいきませんが、参考にできるところは参考にして、小さな努力をお互いにしていったらいいんじゃないかと思います。社会教育という言葉を使っちゃうと制度のような感じになってしまいますが、市民同士の学び合いということですね。

僕が、九州大学の助手をしていた時、確か28歳位だったと思いますが、初めて咸宜園に来た時に、咸宜園の堂守をしているおじいちゃんから、「学ばざれば老いて衰ろう」という淡窓さんが使っておられた言葉を聞かされました。

これは中国の11世紀の哲学者の言葉なんです。「学ばざればすなわち老いて衰ろう（不学便老而衰）」。あなたはこの言葉を知っていますかと聞かれて、すぐには答えられなかったんですが、『近思録』に出てくる言葉です。

世間ではよく高齢化社会と言いますが、これは制度上の言葉です。生きている限りは、年齢は関係ありません。身分もそうです。この場で皆さんと一緒に生きているという時に、年齢も身分も一切関係ない。裸のまま、そのまま生きているわけですから。

そして、生きるということは、学ぶということなんです。だから、「学ばざれば老いて衰ろう」です。佐藤一斎も同じようなことを言っていますが、これが、私が初めて咸宜園に来た時に、堂守をされていたおじいちゃんに教えてもらった言葉として今でも覚えております。

機会がありましたら、また日田にも参りたいと思います。その時も私自身は学びながら生きていると思います。皆さんに学ぶ場でお会いできるのを楽しみにしています。(拍手)

岡野 ありがとうございます。あっという間に時間が過ぎてしまいました。童門先生、吉田先生、そして後藤先生のお話を、会場にいらっしゃいます一人一人の皆様のお心にはどのように感じられましたでしょうか。今日のフォーラムを、少しでも、これからの皆さまの生き方や考え方のヒントにさせていただけるようでしたら、大変うれしく思います。

それでは、先生方にもう一度盛大な拍手をお送りください。(拍手)

咸宜園開塾 200 年記念事業

資料編

- ・新聞掲載記事
- ・追悼：葉室麟さんと咸宜園

史跡「咸宜園跡」 建物は廣瀬淡窓の居宅「秋風庵」



広瀬旭荘資料 大量に発見

咸宜園 2 代目塾主 漢文や愛用の眼鏡など

旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。



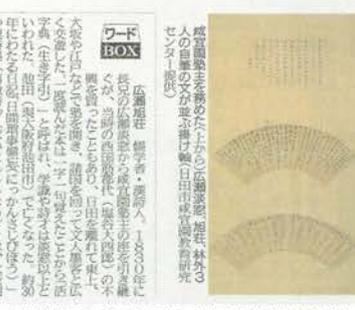
一部を16日から公開 日田市咸宜園 教育研究センター

旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。



旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。

旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。



旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。旭荘の遺品が、新発見の漢文や漢字の資料が大量に見つかりました。

西日本新聞 平成 29 年 2 月 3 日 朝刊掲載

「敬天」で穏やかな社会に

咸宜園開塾 200 年を機に、広瀬旭荘の思想普及に努める淡窓を副会長

野田 高己さん 副

「敬天」で穏やかな社会に

大分合同新聞 平成 29 年 1 月 1 日 朝刊掲載

咸宜園の開塾 200 年を記念

田田でイベント

市民ら約 90 人が参加 全 学芸大会（東郷也）の后 石名堂教授は、明治政

咸宜園の開塾 200 年を記念

大分合同新聞 平成 29 年 1 月 13 日 朝刊掲載

興味を引く仕組みつくる

咸宜園開塾 200 年の記念事業の準備に日田市職員

吉田 博嗣さん 副

興味を引く仕組みつくる

大分合同新聞 平成 29 年 2 月 9 日 朝刊掲載

淡窓の教え 再演

18、19 日 日田で市民ミュージカル「咸く宜し」

主役「心の変化しつかり表現」

永山さん 役

淡窓の教え 再演

大分合同新聞 平成 29 年 2 月 9 日 朝刊掲載

遺言書の写し、眼鏡、水墨画、漢詩文...

広瀬旭荘の新発見資料を初公開



広瀬旭荘が愛用したとみられる眼鏡（右端）など新発見資料が並ぶ会場

江戸時代の書写者・輪染家の末裔で、書写者としての代目として活躍した旭荘（1807〜1873）に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

旭荘は、書写者としての代目として活躍した旭荘（1807〜1873）に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

本館の教育講座として、関係者や市民を招き、旭荘の遺言書と眼鏡に関する報告会を開催する。報告会は13日に先行し、16日に正式な報告会を開催する。旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

市長「粘り強く挑戦」

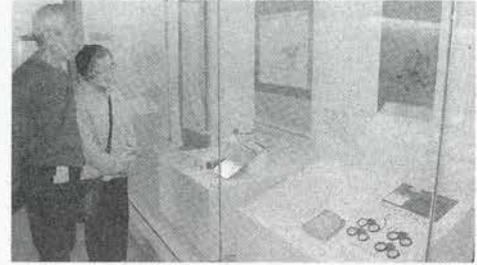


「近世日本の教育遺産群」として威宜園と合わせ、世界遺産登録を目指す豆田町の町並み。豆田町は、威宜園教育センターの隣りにあり、旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

世界遺産見通し立たず

市の資料を取りまとめる必要がある」と推進している。現在、暫定リストは「長崎の教会とキリスト教遺跡」の登録が優先されている。旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

眼鏡など69点を展示



旭荘が使用していたとみられる眼鏡など69点を展示

日田市の市威宜園教育センターで企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が開幕した。旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

大分合同新聞 平成 29年 2月 18日 朝刊掲載

19日 記念事業、参加を

威宜園開塾200周年記念事業

2月19日(日) 旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

大分合同新聞 平成 29年 2月 19日 朝刊掲載

威宜園教育の魅力に迫る 開塾200周年記念の座談会



威宜園について対談する（左から）大石、海原、広瀬の各氏

毎日新聞 平成 29年 2月 20日 朝刊掲載

「細字書」や、交流のあった文人が旭荘に送った漢詩や絵などを展示している。旭荘の遺言書と眼鏡に関する新発見資料を初公開する企画展「旭荘の遺言書と眼鏡」が16日、日田市の威宜園教育センターで始まった。開催期間は3月まで、観覧時間は午前9時〜午後5時。休日は休館。

大分合同新聞 平成 29年 2月 18日 朝刊掲載

塾主、門下生の作品一堂に



咸宜園開塾200年記念事業
咸宜園開塾の200年記念事業「咸宜園門下生遺墨展」が、11月3日（日）日田市三松の八丁日田開かれる。広瀬淡窓が塾主の50人の遺墨を約100点とあわせて展示するのほかに、日田市のゆかりの人物の遺墨も約140点を展示し、咸宜園開塾200周年を記念する。当日は多くの来場者も期待されている。



日田市で3日から

咸宜園塾主10人、門下生50人による、多くの偉人の遺墨が一堂に展示される。咸宜園開塾200周年を記念する。当日は多くの来場者も期待されている。

咸宜園の偉大さ知る遺墨展

塾主、門下生の140点一堂に
あじから市

江戸時代の儒学者広瀬淡窓（咸宜園）の開塾200周年を記念し、日田市で「咸宜園開塾200年記念事業」の一環として、咸宜園塾主10人、門下生50人による、多くの偉人の遺墨が一堂に展示される。当日は多くの来場者も期待されている。



咸宜園開塾200周年記念事業「咸宜園門下生遺墨展」の展示予定の広瀬淡窓自筆の「休道の詩」(咸宜園教育研究センター提供)

咸宜園塾主10人、門下生50人による、多くの偉人の遺墨が一堂に展示される。当日は多くの来場者も期待されている。

西日本新聞 平成 29年 9月 2日 朝刊掲載

日田市出身の画僧・平野五岳 最晩年の大作見つかる

あすから展示

日田市出身の画僧・平野五岳の最晩年の大作が見つかる。この作品は、五岳が晩年に手掛けた。展示場所は、日田市立美術館。



平野五岳作の双輪の一幅。縁起の良い竹輪が描かれている(8月31日、日田市)

日田市出身の画僧・平野五岳の最晩年の大作が見つかる。この作品は、五岳が晩年に手掛けた。展示場所は、日田市立美術館。



平野五岳の自画像(複製)

大分合同新聞 平成 29年 9月 2日 朝刊掲載

淡窓さんの業績 日田市民に伝えたい 広瀬資料館 無料ウィーク

咸宜園200年事業、来月1日から

日田市立美術館の広瀬資料館で、咸宜園塾主10人、門下生50人による、多くの偉人の遺墨が一堂に展示される。当日は多くの来場者も期待されている。



江戸時代の装などが並ぶ広瀬資料館

咸宜園開塾200周年記念事業「咸宜園門下生遺墨展」の展示予定の広瀬淡窓自筆の「休道の詩」(咸宜園教育研究センター提供)

西日本新聞 平成 29年 10月 27日 朝刊掲載

大分合同新聞 平成 29年 9月 1日 朝刊掲載

1817(文化1)年、広瀬淡窓が咸宜園を開いて今年で200年になります。それに合わせて日田市教育委員会が発行した「咸宜園開塾200周年記念事業」の一環として、咸宜園塾主10人、門下生50人による、多くの偉人の遺墨が一堂に展示される。当日は多くの来場者も期待されている。

なるほど 淡窓さん

1日4合5勺食べた塾生
咸宜園塾主10人、門下生50人による、多くの偉人の遺墨が一堂に展示される。当日は多くの来場者も期待されている。

土曜サロン

西日本新聞 平成 29年 12月 2日 朝刊掲載

追悼「葉室麟さんと咸宜園」

2017（平成29）年12月23日、福岡県出身の直木賞作家 葉室麟さんが逝去されました。日田市民にとっても大変悲しい出来事でした。葉室さんは、2011年下半期（第146回）に『蝸ノ記』で直木賞を受賞された後、以前から『文蔵』（PHP文芸文庫）で連載されていた『霖雨』を新たに出版されました。作品は日田の先哲・廣瀬淡窓とその弟久兵衛の兄弟愛を、天領日田を舞台にして描いた歴史小説で、大変好評だったことから文庫本としても出版され人口に膾炙しました。その頃、取材で日田市に訪問された葉室さんは淡窓や久兵衛の末弟で旭荘という人物がとても興味深いとお話され、そのようなご縁で日田市が企画する「廣瀬旭荘没後150年記念事業」の「鼎談（下記写真）」にご出演いただくことになりました。この前後にも廣瀬久兵衛の子孫にあたる廣瀬勝貞大分県知事との対談や西日本新聞社が主催した対談が市内で開催されるなど、市民には身近な存在になっていました。

2017年2月は私塾咸宜園が開かれてから200年の節目の年にあたり、11月10日・11日には咸宜園開塾200年を記念した「嬰鳴フォーラム in ひた」が開催されることになっていました。市から葉室さんに再度ご出演の依頼をしたところ、ご快諾をいただき当日は多くの方が歴史小説作家の童門冬二さんと葉室さんの初対談を楽しみにしていたのですが・・・。日田市の歴史と文化を愛でていただいた故葉室麟さんに改めて哀悼の意を表します。



2012年4月 廣瀬勝貞 大分県知事との記念対談
撮影場所：咸宜園跡（廣瀬淡窓の居宅 秋風庵の縁側）
この対談は、文庫本『霖雨』の巻末にも収録。



2012年8月19日 廣瀬旭荘没後150年記念鼎談 於：パトリア日田
（左からロバート キャンベル氏、葉室麟氏、井上敏幸氏）



美しい日本人に
出逢える物語
理不尽に負けない。凜として生きる。
PHP文芸文庫 定価・本体740円(税別)

「PHP文芸文庫」



『霖雨』（PHP研究所）、廣瀬旭荘と妻・松子の絆を描いた作品『雨と詩人と落花と』（徳間書店）

咸宜園開塾 200 年記念事業

資料編

廣瀬淡窓・咸宜園の顕彰活動のあゆみ

史跡「咸宜園跡」 右手前は「休道之詩」碑、中央は秋風庵



廣瀬淡窓・咸宜園の顕彰活動のあゆみ

はじめに

平成 29 (2017) 年 2 月、廣瀬淡窓 (1782 ~ 1856) が開いた私塾「咸宜園」は文化 14 (1817) 年の開塾から 200 年の節目を迎えた。そこで日田市では平成 29 年 2 月から平成 30 年 2 月までの 2 か年にわたって、記念式典や講演会、シンポジウムなどを開催したほか記念誌の刊行などに取り組んだ。これらの事業を総称して「咸宜園開塾 200 年記念事業」と呼んでいる。これまでも廣瀬淡窓を記念する事業は生誕や没後の周年を機に幾度となく開催されてきたが、今回のように咸宜園を記念した事業の取組みはなかったように思われる。

そこで、このたびの記念事業の取組みを終えて、改めて咸宜園の歴史を振り返り、過去に実施された廣瀬淡窓や咸宜園、廣瀬家に関する顕彰活動と記念事業について、限られた資料からの掘り起こしではあるが整理してまとめた。

廣瀬淡窓が最初の塾を開いたのは、文化 2 (1805) 年 3 月 淡窓 24 歳のときであった。淡窓は幼少期に豆田町にある長福寺の法幢上人から『詩経』を学んでいるが、最初の塾は学僧の集う長福寺学寮(「楽法楼」と呼称)の一室を借りて開いている。

その後、間もなくして豆田町一丁目の大坂屋林左衛門の敷地内に移居し、塾名を「成章舎」と名付けた。ここでは咸宜園を代表する教育内容の一つで「月旦評」と呼ばれる成績評価制度が誕生し、この時から学力による塾生の評価が始まった。しかしながら、「成章舎」での学問教授は生活環境などに恵まれず長くは続かなかった。その後も生家である廣瀬本家の土蔵を使用して塾を続けるなど、塾の経営が軌道に乗るまでには今しばらくの時間がかかっている。

長福寺学寮の開塾から 2 年が経過した文化 4 年、淡窓はかねてより切望していた教育環境を手にすることができた。豆田町の有力な商家・手島家の土地を借用し、また塾生たちの協力も得て、自らの建設による新塾を開くことが出来た。塾名は「桂林園(別名は桂林荘)」と名付け、豆田町の東側に位置し町の喧騒を離れた静かな良地であった。

その後、次第に入門者も増え始め、塾の経営は安定するかに見えたが、次に直面したのは淡窓自身の健康面での不安であった。その頃の淡窓は、後に人生の「三大厄」とされた大病を患っており、実家の豆田町から桂林園へと日々通い続けながら教授していた。

しかしながら、およそ 10 年が経過した頃に新塾の建設移転を決意する。そこで開塾したのが「咸宜園」である。

咸宜園は文化 14 年 2 月に開いた私塾の名前で、安政 3 (1856) 年の淡窓没後も塾は継続され、明治 7 年に一時閉鎖されたこともあったが同 12 年には咸宜園出身者により再開され、その後は明治 30 年まで継続した。

これまでの廣瀬家や咸宜園の顕彰活動を振り返ると、廣瀬家では従前から先祖供養とともに「廣瀬八賢」など先賢の偉業を顕彰する意識が高く、また淡窓没後の明治期には咸宜園出身者や門下生たちによって淡窓の蔵書を保管するために書蔵庫の建築を行うなど保存顕彰の動きが始まっていた。

続いて、大正・昭和期に入ると咸宜園出身者が中心となり市民を巻き込んだ活動へと発展する動きも見えてくる。次第に広がっていく顕彰活動や記念事業については、廣瀬家や咸宜園出身者、関係団体や行政等がそれぞれの役割をしっかりと果たしてきて現在につながっている。

淡窓の没後から明治 30 年の咸宜園閉塾以降、現在までの取組みを明らかにし、今後の顕彰活動や記念事業の参考となるよう整理したい。

一、明治期から大正期までの廣瀬淡窓・咸宜園に関する顕彰活動及び記念事業

幕末維新时期には、淡窓に学んだ多くの門人たちが全国各地でその実力をいかんなく発揮していた。中でも明治新政府では文部官僚として「学制」の制定に大きく関わった長三洲や地方官僚として中央から派遣された県令の中には、松田道之(初代滋賀県令や東京府知事など)や島惟精(初代岩手県令や茨城県令など)、中村元雄(群馬県知事)などがいた。東京では咸宜園出身者たちが集まり、「玉川吟社」なる結社も生まれているが、その構成メンバーの多くは官僚で、維新前は漢学者であったものが多く含まれていた。このような結社での活動は、人的ネットワークの広がりとともに、新しい時代を担う人材が多く活躍し、新政府におけるその影響力も多少なり

咸宜園関係略年譜と顕彰事業一覧

西暦	和暦	月	事業・出来事	備考（主催者・発行者等）
1782	天明 2	4	廣瀬淡窓生まれる	
1805	文化 2	3	長福寺学寮（「薬法楼」）で最初の塾を開く	
1805	文化 2	8	豆田町一丁目大坂屋の敷地内で私塾「成章舎」を開く	
1807	文化 4	6	豆田裏町に転居して私塾「桂林園」を新設	
1817	文化 14	2	堀田村（現在地）に私塾「咸宜園」を新設	
1856	安政 3	11	廣瀬淡窓死去（享年 75 歳）	
1874	明治 7	—	咸宜園一時閉鎖（廣瀬林外死去）	
1879	明治 12	—	咸宜園再開	
1890	明治 23	1	雑誌『咸宜園』の創刊	
1890	明治 23	12	咸宜園内に書蔵庫を建設	
1897	明治 30	9	咸宜園閉塾	
1913	大正 2	7	廣瀬淡窓頌徳祭（生誕 130 年祭）・咸宜園絵図の作成	
1915	大正 4	11	廣瀬淡窓が正五位に叙任される。	
1916	大正 5	4	咸宜園敷地内に淡窓図書館が開館	
1919	大正 8	12	休道之詩碑の建立（咸宜園跡地に現存）	日田郡教育会
—	大正中	11	「淡窓祭」の開催（毎年 11 月 1 日） 現在も「平成淡窓祭」として継続	現在は淡窓会主催
1925	大正 14	11	広瀬淡窓 70 年忌祭の開催	日田郡教育会
1925	大正 14	11	盛典（広瀬淡窓 70 年忌祭）の開催（場所：華族会館）	清浦奎吾伯爵の主催
1925	大正 14	12	『淡窓全集』刊行（～昭和 2 年 1 月）	日田郡教育会
1930	昭和 5	—	廣瀬淡窓の「万善簿」が国定教科書に掲載	
1932	昭和 7	7	「咸宜園跡」が国史跡に指定	
1936	昭和 11	6	咸宜園写真帖の刊行	大分県日田淡窓図書館
1948	昭和 23	1	「廣瀬淡窓墓」が国史跡に指定	
1952	昭和 27	12	淡窓会（日田）が発足。本格的な始動は同 29 年 11 月。	淡窓会
1955	昭和 30	11	淡窓先生百年祭（100 回忌）を開催	淡窓会
1965	昭和 40	—	廣瀬八賢顕彰会（日田）の発足	廣瀬宗家
1967	昭和 42	—	淡窓研究会（東京）が発足	淡窓研究会
1969	昭和 44	秋	廣瀬先賢文庫の建設	廣瀬宗家
1969	昭和 44	—	玉川大学内に咸宜園の秋風庵を模築	玉川大学
1970	昭和 45	3	『廣瀬青邨詩鈔』の刊行	吉川孔敏
1971	昭和 46 頃	—	『廣瀬家学全集』の刊行が計画される	廣瀬宗家
1972	昭和 47	—	『敬天』創刊号（淡窓会）の刊行	淡窓会
1972	昭和 47	—	『旭莊全集』刊行に向けた作業開始	昭和 57 年から発刊
1973	昭和 48	8	『日田廣瀬家三百年の歩み』の刊行	廣瀬先賢顕彰会
1974	昭和 49	5	『咸宜園出身八百名略伝集』の刊行	廣瀬宗家
1975	昭和 50	5	『咸宜園出身二百名略伝集』咸宜園出身八百名略伝集続編（一）の刊行	廣瀬宗家
1981	昭和 56	11	廣瀬淡窓生誕 200 年記念式典を開催	日田市
1982	昭和 57	6	『廣瀬旭莊全集』第 1 巻の刊行	編）廣瀬旭莊全集編集委員会
1990	平成 2	3	咸宜園跡の歴史公園化を計画	『日田市第 3 次総合計画』
1990	平成 2	—	全国咸宜園門下生子孫の集い（～同 6 年）	地域活性化懇話会
1992	平成 4	3	史跡咸宜園跡保存整備基本構想の策定	日田市
1997	平成 9	—	史跡咸宜園跡の公有化（～同 13 年度：史跡地東側）	日田市
2005	平成 17	11	広瀬淡窓没後 150 年記念事業の開催	日田市・日田市教育委員会
2005	平成 17	12	広瀬淡窓没後 150 周年記念シンポジウムの開催	大分県・大分県教育委員会
2010	平成 22	10	咸宜園教育研究センター開設	日田市
2011	平成 23	—	咸宜園教育顕彰事業の創設	日田市教育委員会
2012	平成 24	2	「咸宜園の日」を制定	日田市教育委員会
2012	平成 24	8	廣瀬旭莊没後 150 年記念事業を開催（～ 9 月）	日田市・日田市教育委員会
2013	平成 25	3	「廣瀬淡窓旧宅及び墓」が国史跡に指定（「廣瀬淡窓墓」に追加指定）	
2015	平成 27	4	「咸宜園跡」や「廣瀬淡窓旧宅及び墓」などが「日本遺産」に認定	
2017	平成 29	2	咸宜園開塾 200 年記念事業「記念式典・記念講演・記念鼎談」開催	日田市・日田市教育委員会
2017	平成 29	3	史跡咸宜園跡の公有化（史跡地西側）	日田市
2017	平成 29	11	咸宜園開塾 200 年記念事業「嚶鳴フォーラム in ひた」開催	日田市・日田市教育委員会
2018	平成 30	2	咸宜園開塾 200 年記念事業「咸宜園門下生子孫の集い」開催	日田市・日田市教育委員会
2018	平成 30	3	咸宜園教育研究センター研究奨励事業の創設	日田市教育委員会

ともあったのではなからうか。咸宜園出身者の中には教育者も多く、以前は塾を主宰し、寺子屋の師匠なども多かったが明治政府が打ち出した新たな教育制度のもとで、公教育における指導者としても大いに活躍している。

一方で、明治期における咸宜園の経営は新教育への対応が遅れ、高等教育の中心は英語や法律の専門学校が多く新設された都市部へと移り変わり、地方における学校経営は厳しさを増し、とりわけ伝統ある咸宜園などの漢学塾は次第に閉鎖されていった。

淡窓没後から凡そ40年後の明治30年に咸宜園は閉塾となったが、塾はその間も新教育への対応を図ったこともあったが、現実的には塾の運営と維持活動は衰え、咸宜園は教育の場から史跡としての記念すべき歴史的な場所（記念物）、あるいは教育者や詩吟愛好家などによる淡窓を顕彰する場所として変化していった。この時期における主な取組は次に掲げるとおりである。

- 一、書蔵庫の建設 明治23年
- 一、咸宜園文庫設立と淡窓図書館の建設 大正2～5年
- 一、廣瀬淡窓が正五位に叙任 大正4年
- 一、「休道之詩」碑の建立 大正8年
大正8年、咸宜園出身者の高取悦堂ら有志による建立
- 一、広瀬淡窓70年忌祭の開催 大正11年11月1日実施
- 一、「淡窓祭」の開催
大正中期頃に始まったとされる「淡窓祭」は淡窓の命日である11月1日に毎年開催された。現在も淡窓会により「平成淡窓祭」と名称を変更して継続されている。



大正8年建立「休道之詩」碑（史跡咸宜園跡）

(1) 咸宜園出身者による顕彰活動

淡窓没後の咸宜園出身者による事業として、まず最初に行われたのは明治23（1890）年に建築された「書蔵庫」の建設である。当時の咸宜園塾主は淡窓時代の門人で諫山菽邨（1825～1893）であった。菽邨は咸宜園の蔵書が火災で失われないように、咸宜園の東塾（寮舎）を売却し、その収益で建設したことが棟木の墨書に残されている。これも一つの顕彰事業として捉えることができる。書蔵庫は現在も咸宜園内に現存し、史跡咸宜園跡を構成する文化財として適切に保存されている。

・咸宜園文庫設立趣意書

往時淡窓先生家塾咸宜園ヲ開キ帷ヲ下シテ教授セラルヽヤ青衿ノ士遠近來リ學ブモノ前後四千餘人星霜實ニ五十年ニ及ベリ旭莊、青邨、林外三先生箕裘相繼テ育英ノ任ニ當リ四先生門下ノ秀才ニシテ名ヲ天下ニ揚ゲシモノ實ニ屈指ニ邊アラズ蓋咸宜園ガ世ノ文化ヲ裨益シ風教ヲ維持シタル其功ヤ偉ナリト謂フベシ

維新以降茲ニ四十餘年其間青邨、林外二先生前後相繼テ東京ニ歿セラレ村上姑南、諫山菽村二氏ノ如キ一時咸宜園ヲ守リテ子弟ヲ教育セシモノ亦已ニ歿シ爾後絃誦聲絶テ塾舎頽廢シ松杉漸影老テ庭園荒涼タリ今ヤ昔日ノ紀念トシテ見ルヘキモノ僅ニ淡窓先生ノ舊居和肅堂、遠思樓及ビ藏書五千餘卷ヲ存スルノミ今ニシテ之ガ保存ノ方法ヲ講ゼズ空シク荒廢散逸ニ歸セシムルハ誠ニ千歳ノ恨事ニシテ亦實ニ風教ヲ維持スルノ道ニアラス

抑青年子弟ヲ薰陶シ其品性ヲ高尚ナラシムルハ單ニ學校教育ニ一任スヘキニアラス務メテ古今ノ賢哲偉人ニ私淑セシメ自然ノ感化ニヨリテ其德性ヲ涵養セシメザルヘカラス泰西諸國カ先賢偉人ノ遺物ヲ蒐集スルニ斷簡零墨モ尚且千金ヲ吝マザルハ此主旨ニ外ナラサルナリ我國現時風教ノ陵夷スルヤ特ニ其必要アリ豈一日モ之ヲ忽ニスヘケンヤ

是ニ於テ本會ハ本會ノ事業トシテ咸宜園文庫ヲ設立シテ藏書遺墨等ヲ不朽ニ傳ヘント欲ス大方諸彦幸ニ贊助アラントヲ冀フ

大正二年十二月

次に、咸宜園第8代塾主の廣瀬貞文（号は濠田・1853～1914）による取組である。この人物の実父は咸宜園在塾中に淡窓の養子となり、淡窓没後の咸宜園を引継いだ廣瀬青邨（1819～1884）で、貞文は咸宜園西家で生まれたとされる。実子のなかった淡窓にとって貞文の誕生は初孫にあたる存在であった。

貞文の咸宜園入門簿は現存しないが、咸宜園に在塾した証拠は月旦評（咸宜園の成績表）に名前が記載されていることである。成績は優秀で明治4年4月の月旦評では四権八級下まで昇級しているが退塾時の月旦評は不詳である。

その後の貞文は、後に咸宜園出身者で福澤諭吉門下となった朝吹英二の紹介を受けて慶応義塾に入塾したことが分かっている。

前置きが長くなったが貞文の咸宜園顕彰活動は特筆すべきである。明治40年から日田町長を務めた貞文は、大正2（1913）年に淡窓生誕130年祭とする頌徳祭を開催した。豆田町に生まれた咸宜園出身の画家で長岡永邨による「咸宜園絵図」（図1）はこの時に作成され、現存する「秋風庵」の写真を使用した絵葉書も同年に作成された。さらに、この年の12月には「咸宜園文庫設立趣意書」が作成されている。

また、続く2年後の大正4年には「淡窓図書館」建設の動きが生じているが、これも貞文が日田町長に在任中のこととされている。

この趣意書の原案とも言える史料は国文学研究資料館の「広瀬青邨文庫」から発見されている。史料名は「宜園文庫創立趣意書草案」とあり、明治42年5月に作成されたものであるが、当時はすでに青邨は他界しており、文庫や文書の性格から青邨の長子であった廣瀬貞文によって作成された可能性が高い。

当時、貞文はすでに日田町長に就任しており、大正2年に実施した「廣瀬淡窓頌徳祭」では主催する側の中心にあった人物である。この趣意書の成文化にも大きな影響力を持っていたと思われるのである。なお、趣意書の内容については『咸宜園教育研究センター研究紀要第7号』（2017日田市教育委員会）に詳しくふれてある。

その後、本計画は大正5年に咸宜園東家側に建設された日田郡教育会所管の「淡窓図書館（現在の日田市立淡窓図書館）」の完成につながり、咸宜園の蔵書類は図書館において一時的に所蔵管理されることになったが、後に淡窓の蔵書とともに現在の公益財団法人廣瀬資料館にて一括管理されることになった。



図1 咸宜園絵図（大正2年 長岡永邨作 公益財団法人廣瀬資料館蔵）

この絵図が作られた当時の園内には、図の左側に和肅堂と記された現在の秋風庵のみが残っていたと思われる。この頌徳祭には咸宜園出身者も多く参加しており、咸宜園で実際に学んだ門人たちにより集められた情報をもとに日田出身の門下生で画家の長岡永邨が描いた。当時の日田町長は廣瀬貞文で彼は咸宜園で生まれ育ち、また学んだ場所であっただけに往時の面影の薄くなった旧知の場所を絵図として再現するのは感慨深いものであったと想像する。平成4年度から始まった咸宜園の発掘調査では絵図に描かれた建物の遺構（痕跡）が発見され、この絵図の信ぴょう性の高さが証明されている。

二、昭和期の廣瀬淡窓・咸宜園に関する顕彰活動及び記念事業

この時期は戦前と戦後に分けて大きな画期を迎える事柄がいくつかあった。まずは昭和7年の「咸宜園跡」の国指定史跡の動きである。全国では近世の私塾で国の指定文化財(指定時の性格が教育遺産の物件のみ)となって保護されているのは、藤樹書院(滋賀県)、古義堂(京都府)、適塾(大阪府)、松下村塾(山口県)、咸宜園跡(大分県)とわずかに5例だけである。また、各地では地域における先人・先哲の顕彰活動が活発化する時期でもあった。この時期における主な取組等は次に掲げるとおりである。

一、『淡窓全集』(大正15年から昭和2年)の刊行

一、国定教科書への採用

昭和5年に淡窓が実践した「万善簿」が国定教科書高等科1年生用の修身書『反省』の題として取り上げられた。(昭和47年刊行の『敬天』創刊号より)

一、文化財の指定

昭和7年には「咸宜園跡」が、昭和23年には淡窓らの墓が眠る通称「長生園」が「廣瀬淡窓墓」として国の史跡に指定された。

一、昭和天皇の行幸(昭和24年6月9日、咸宜園の「秋風庵」にて廣瀬八賢の著書を御覧になる)

昭和21年10月18日、昭和天皇に京都大学名誉教授の小西重直氏が「教育家としての廣瀬淡窓先生と其の学制論」と題して御進講された。内容は「教育家としての淡窓」と「其の著 迂言と学制論」であった。

一、淡窓会の発足と淡窓100年祭(淡窓没後100年忌)

淡窓会の正式な発足は昭和27年、淡窓100年祭の開催は昭和30年11月1日に淡窓会の主催で実施された。詳細は次の(1)淡窓会の項でふれる。

一、淡窓研究会の発足

昭和42年に東京で発足した研究会で、詳しくは(2)淡窓研究会でふれる。

一、「廣瀬八賢顕彰会」及び「廣瀬先賢顕彰会」

詳しくは(3)廣瀬名家による顕彰活動「廣瀬八賢顕彰会」及び「廣瀬先賢顕彰会」でふれる。

一、淡窓生誕200年祭

昭和56年に日田市の主催で開催した。詳しくは(4)廣瀬淡窓先生生誕200年記念事業でふれる。

昭和期には日田の地で「淡窓会」が誕生し、次に東京では「淡窓研究会(旧称「淡窓会」)」が生まれ、この2つの団体が当該時期の研究者や市民を巻き込んだ顕彰活動や研究活動などが始まる契機となっている。また各地の先人や先哲を顕彰する団体との交流も生まれ、地域間での活動も盛んになっている。まずはこの二つの団体の沿革や活動内容について説明した後、廣瀬名家を中心とした「廣瀬先賢顕彰会」などの取組についてふれる。その後昭和56年に実施した「廣瀬淡窓先生生誕200年」の取組を紹介する。

(1) 淡窓会

淡窓会の発足は会報誌『敬天』(創刊号)によれば、その始まりは昭和25年頃までさかのぼる。5年後(昭和30年)には淡窓没後の100年忌を迎えることから日田郡市の有志や教育関係者の間で100年祭の開催を望む声が大きくなっていた。そこで当時の日田市長が委員長となり、「廣瀬淡窓先生100年準備委員会」が結成された。

その後、昭和27年12月には準備委員会に代わる組織として「淡窓会」が誕生し、100年祭を開催するにあたって趣意書や規約、祭典祝典、記念行事、記念事業等の予算案(3,400万円)を作成するなどの作業を進めていた。しかしながら、本格的な取組を行おうとした矢先に日田市は大きな災害を被ることになってしまった。昭和28年6月に発生した「昭和28年西日本水害(筑後川水害)」である。

九州地方北部を中心に大雨による水害が発生し、被災者数は100万人を超える九州史上、最も大きな災害であった。本市も市内の三隈川(筑後川)を中心に起こった洪水で市民生活は甚大な被害となり、淡窓会の活動も中止せざるを得なかったようである。活動を再開したのは翌29年の11月からで、組織には大分県知事を名誉会長に迎え、事務局は当時咸宜園の外に移築されていた「遠思楼」(現在は咸宜園内に移築保存)内に置かれていた。

当時の事業計画は次のようなものであった。

- 一、淡窓 100 年祭典・式典 昭和 30 年 11 月 1 日（火）
- 一、記念文化行事（全 3 日間）
- 一、遠思楼の移築（現在、咸宜園跡地内に移築され整備されている）
- 一、淡窓胸像作製（朝倉文夫作：現在、咸宜園教育研究センターで常時展示）
- 一、長生園・秋風庵修築整備（秋風庵は咸宜園内に、長生園は咸宜園より徒歩 5 分の位置に現存）
- 一、淡窓詩軸の頒布
- 一、記念出版（古川克己著『教聖広瀬淡窓』昭和 30 年刊行）

また、日田市では淡窓 100 年祭と市制 20 周年を記念して「淡窓図書館」の改築（昭和 35 年開館）や「日田市立博物館」（昭和 36 年開館）の建設などの事業も記念して実施された。

そのほか、熊本県出身のジャーナリストで思想家として活躍した徳富蘇峰は淡窓 100 年祭を記念して次のような祝辞を用意した。当時の蘇峰は最晩年にあたる 93 歳の年であった。

淡窓広瀬先生ハ、日本ニ於ケル卓越ノ詩人ニシテ、偉大ナル教育家ナリ、咸宜園ノ門ニ出入スル子弟幾百人、其ノ流風餘韻ハ今猶厳然トシテ存ス
先生ノ遺徳実ニ大ナル哉、今茲ニ郷党ノ諸君ハ先生ノ為ニ百年祭ヲ営ムニ際シ、予ニ一言ヲ微セラル、予曾テ日田ニ遊ビ先生遺跡ヲ訪ヒ其ノ郷人ニ接シ、咸宜園ノ盛時ヲ緬想シ感慨禁スル克ハザルモノアリキ、今ヤ我国師弟ノ道義地ニ墮チ、教育ノ根本義殆ント亡滅セントスルニ幾シ
此時ニ於テ先生百年祭ヲ見ル、豈ニ偶然ナランヤ、若シ先生ノ遺徳ヲ顕彰シ、之ニヨツテ反省省覚、举世ノ弊風ヲ一掃スルヲ得ハ、其ノ慶更ニ大ナリト謂フ可キ

火国後学 蘇峰菅原正敬頌令九十三

【淡窓会会則】

- 第一章 名称および所在地
 - 第一条 本会は淡窓会と称す
 - 第二条 本会の事務局を日田市教育庁内に置く
- 第二章 目的および事業
 - 第三条 本会は広瀬淡窓先生の遺徳を顕彰し、広く宜園の教育精神を昂揚し、もつて文化の興隆に寄与することを目的とする
 - 第四条 本会は前条の目的を達成するため左の事業を行う
 - 一、遺徳の顕彰に関する事項
 - 二、淡窓先生の資料蒐集に関する事項
 - 三、淡窓先生の遺跡等整備に関する事項
 - 四、その他本会の目的達成に必要となる事項
- 第三章 会 員
 - 第五条 本会の趣旨に賛同し、定められた会費を納入した者を会員とする
 - 第六条 本会に功労ある者はその労に酬ゆるため会員に推せんする
- 第四章 役 員
 - 第七条 本会に左の役員を置く
会長一名 副会長二名 委員若干名 会計監査二名
 - 第八条 会長は日田市長の職にある者、副会長は総会の同意を得て会長が選任する
 - 第九条 委員は会員中より会長が委嘱する
 - 第十条 会計監査は委員会において選出する
 - 第十一条 役員の任期は、その職により就任した者はその在任期間とし、その他の役員は二ヶ年とする
 - 第十二条 会長は本会を代表し会務を統轄する
副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する委員は本会の事業の企画、推進、

実現を図るために、これが案件の処理にあたる。委員中より常任委員若干名を会長より委嘱する。常任委員は常時本会の案件を処理する

- 第十三条 本会が必要と認めるときには、会長は顧問を委嘱することができる
- 第五章 会議
- 第十四条 会議は総会、委員会、常任委員会とする
- 第十五条 総会は毎年一回開かなければならない
委員会および常任委員会は会長の必要に応じて適宜開くことができる
- 第十六条 会議は左の事項を審議する
- 一、第四条に関する事項
 - 二、予算決算に関する事項
 - 三、役員選出に関する事項
 - 四、会則の制定改廃に関する事項
 - 五、その他重要な事項で、会長が必要と認めた事項
- 第十七条 会議は出席者の過半数をもってこれを決する、可否同数のときは議長の決するところによる
- 第六章 事務局
- 第十八条 本会の運営を円滑ならしむるため、事務局に書記若干名を置く
- 第七章 会計
- 第十九条 本会の経費は会費およびその他の収入をもってこれにあてる
- 第二十条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る

淡窓会の活動は、淡窓 100 年祭の執行後も会の目的にあるとおり、淡窓先生の顕彰活動を通じて、地域の文化的発展に寄与する働きを果たしてきたのである。

会は平成 23 年度成宜園教育顕彰事業の教育文化部門において、これまでの活動とその成果が評価され、優秀賞を受賞するとともに、同事業の最高賞に位置付けられる「廣瀬淡窓賞」も併せて受賞された。

本会の活動とその研究成果をまとめた会報誌『敬天』が平成 24 年に記念すべき 50 号を刊行したことも大きく評価された。

(2) 淡窓研究会

淡窓研究会は昭和 42 (1967) 年に廣瀬家第十世の廣瀬正雄氏 (当時は衆議院議員) と石川謙氏 (当時は日本大学教授。後にお茶の水女子大学名誉教授)、石川松太郎氏 (当時は和洋女子大学勤務。後に日本女子大学教授)、淡窓研究家の中島市三郎氏の会合をきっかけとして東京にて発足した。設立当初は「淡窓会」と称し、廣瀬淡窓や成宜園教育に関心を抱く研究者を中心とする研究会であった。

初代会長は石川謙氏が務めた後、古川哲史氏 (東京大学教授) などが会長を継いでいる。当時の会員には教育史学を専門とする武田勘次氏や小久保明浩氏などがいた。

その後、平成元年に一時休会となったが、平成 12 年に第十一世の廣瀬貞雄氏を会長として活動が再開された。その間、会の名称は変更され現在の「淡窓研究会」に至っている。

現在の活動は年 2 回の定例研究会で、毎年 6 月と 12 月の第一土曜日に都内で開催しており、平成 17 年に『淡窓研究会会報』の創刊号を発行して以降、8 号までが刊行されている。

(3) 廣瀬本家による顕彰活動「廣瀬八賢顕彰会」及び「廣瀬先賢顕彰会」

昭和 42 年に東京で発足した淡窓研究会に先立って、日田市にはすでに淡窓会が設立されていた時期であるが、昭和 42 年に廣瀬家が発行した『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』の奥付には著作者、発行所として「廣瀬八賢顕彰会」なる団体名が記されている。所在地は「大分県日田市御幸通魚町 広瀬宗家方」とあり、現在の廣瀬宗家の中に事務局を有した会であったことがわかる。しかしながら、それ以外にこの団体名を見ることはできない。また同じ昭和 40 年代には廣瀬宗家内において、「廣瀬先賢顕彰会」なる組織が立ち上がっている。先ほどと同様に、設立の背景は不詳であるが、現在の日田廣瀬家が江戸時代に筑前博多より豊後日田に移住してから満 300 年を迎える昭和 48 年 8 月 5 日が大きく関係していたと思われる。

これは昭和 48 年という年が廣瀬家にとって大きな節目の年であり、記念事業の実施に向けた大きな動きの一つであったことがわかる。先の顕彰会と同じく、当然ながら本会の組織も廣瀬本家 (大分県日田市豆田町九の七)

を中心としたものであった。

なお、当時の廣瀬家当主は第十世の廣瀬正雄氏で、昭和40年頃の正雄氏は衆議院議員当選6期目の任期中で、同46年には郵政大臣に就任、以降も連続10期の当選を果たしている。廣瀬宗家やその他の関係団体は、昭和40年からの約10年間に下記のような刊行物を発行した。

廣瀬正雄〔昭和40年（1965）〕『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』廣瀬八賢顕彰会
日田郡教育会編〔昭和46年（1971）〕『増補 淡窓全集』（全3巻）思文閣
池田範六〔昭和47年（1972）〕「淡窓先生遺徳顕彰のかずかず」（『敬天』創刊号）淡窓会
廣瀬先賢顕彰会編〔昭和48年（1973）〕『日田廣瀬家三百年の歩み』廣瀬先賢顕彰会
廣瀬正雄先生伝記刊行会編〔昭和49年（1974）〕『廣瀬正雄伝』（全3巻）
廣瀬先賢顕彰会（中野 範）編〔昭和49年（1974）〕『咸宜園出身八百名略伝集』廣瀬宗家
廣瀬先賢顕彰会（中野 範）編〔昭和50年（1975）〕『咸宜園出身二百名略伝集』咸宜園出身800名
略伝集続編（一）

このほか昭和44年には「廣瀬先賢文庫」の建設が行われ、後の昭和57年から刊行が始まった『廣瀬旭荘全集』（全11巻）もこの頃から計画されていたようだ。

廣瀬家では廣瀬淡窓や咸宜園だけでなく、廣瀬家の歩みも含めて総合的な顕彰活動が行われており、この時期の廣瀬家の取組みは現在文化財として保存されている「廣瀬淡窓旧宅及び墓」や「咸宜園跡」などの文化遺産の保存と継承にもつながるなど高く評価される取組みと言える。

また、先にふれた『廣瀬旭荘全集』も廣瀬家による顕彰活動の一環と言えるが、平成57年の刊行から平成6年には廣瀬旭荘の日記『日間瑣事備忘』の全9巻が揃ったほか、その他にも「随筆編」や「詩文編」などが続いて発行された。

（4）廣瀬淡窓先生 生誕200年記念事業

この取組みは、昭和56年11月11日に日田市の主催により開催された事業である。会場は日田市中央公民館ホールであった。以下の内容は、記念式典当日に準備された資料より抜粋。

◆記念式典及び記念講演

期 日 平成56年11月11日（水）
演 題 「淡窓先生の心」永遠に生きる人
講 師 西南女学院 院長 井上 義巳 氏

◇演劇公演

昭和56年10月9日（金） 場所：日田市民会館ホール
「風光り水澄む郷」大友宗麟物語（作・演出：榎本 滋民 氏、主演：田村 高広 氏）

◇文化講演会

昭和56年11月2日（日） 場所：日田市民会館ホール
演 題 「現代日本の社会構図」
講 師 社会評論家 草柳 大蔵 氏

◇記念展 「廣瀬淡窓、その一門ならびに咸宜園出身者の書画、遺作、遺品の展覧」出品数は130点

期 間 昭和56年11月11日（水）～15日（日）
場 所 日田市中央公民館ギャラリー

◇記念展図録発刊

「書画、遺作、遺品集」 頒布価格 1,000円

◇淡窓読本発刊

廣瀬淡窓先生生誕200年記念
『淡窓先生』（対象：小学生以上）
著書 大久保 正尾 氏
発行 日田市教育委員会、発行日 昭和56年11月11日、頒布価格 500円

◇現代名書家展

廣瀬淡窓詩を題材とした書家36名による揮毫展覧会（作品は、現在咸宜園教育研究センターが所蔵）

期 間 昭和 56 年 11 月 11 日 (水) ~ 16 日 (月)
場 所 日田岩田屋ホール

(5) 記念碑の建立

A、詩 碑

昭和期には市内各所に淡窓会などが詩碑を建立している。このような淡窓の漢詩を刻銘した詩碑が最初に立碑されたのは先に触れたように大正 8 年のことであった。咸宜園出身者で地方判事として活躍した高取悦堂ら有志で建立したとある。題材は「桂林荘雜詠示諸生」四首の 2 番目にあたる詩「休道之詩」が採用された。後に悦堂は『淡窓全集』(全 3 巻)の編集発行にも関わるなど、当該時期における顕彰活動の中心メンバーの一人でもあった。この他、日田市内には淡窓会により設置された石碑が 19 箇所ある。

B、歌 碑

心静かに観ればみな宜しうべなひて
咸宜園とは名づけましけむ 比露思

この歌碑は、咸宜園西家側に現存する井戸(西塾跡の北側)の近くで、昭和 42 年陽春に名誉市民井上正之翁(号紫山)が建立し、咸宜園塾生の生活を偲ぶにたる古井戸を含んだ土地を整備して、日田市に寄贈したものである。

歌の作者は、当時、大分大学学長の花田大五郎氏で、『あけび歌の会』の主宰者であり、号を比露思とした。碑の内容は淡窓先生の遺徳を仰いでのものであった。書は花田氏が病気であったため、「あけび歌の会」同人の今田哲夫氏が揮毫し、碑陰は古川克己氏によるもの。

三、平成以降の廣瀬淡窓・咸宜園に関する顕彰活動及び記念事業

平成期の咸宜園に関する事業は、文化財としての保存整備や教育普及での活用に重点が置かれた取組が目立つようになる。

昭和 7 年に国指定の史跡となった「咸宜園跡」は、指定から半世紀以上が経過した平成 4 年に「史跡咸宜園跡保存整備構想」が作成され、その後は整備計画に基づき史跡地内の発掘調査や秋風庵・遠思楼などの建造物の保存修理事業に着手した。また平成 9 年度からは史跡地東側の公有化が始まり、本格的な整備事業に着手したのは平成 15 年度のことであった。

現在は史跡東側の整備が一段落し、史跡の西側も平成 29 年度に公有化を終えるなど、史跡全体の公有化が完了したことにより、史跡としての適切な保護と将来的な文化財としての活用が可能となった。

この時期における主な取組みは次に掲げるとおりである。

- 一、「秋風庵・遠思楼」の平成の大修理と国史跡「咸宜園跡」の公有化及び保存整備事業
事業の詳細は『史跡咸宜園跡保存整備事業報告書』(2016)に詳しい。
- 一、廣瀬淡窓没後 150 年記念事業
平成 17 年に大分県及び日田市で開催された記念事業。詳細は別項を参照。
- 一、史跡「咸宜園跡」東側の第一次整備完了
- 一、咸宜園教育研究センターの開館
平成 22 年 10 月に史跡咸宜園跡のガイダンス施設として、また廣瀬淡窓や咸宜園に関する調査研究や普及啓発を行う機関として創設
- 一、廣瀬旭荘没後 150 年記念事業
- 一、世界遺産登録推進事業の開始(平成 21 年度からの取組)と日本遺産の認定(平成 27 年度認定)
- 一、咸宜園開塾 200 年記念事業

平成 17 年度

この年には、日田市による「廣瀬淡窓没後 150 年記念事業」や大分市を中心に開催された大分県主催による「廣瀬淡窓没後 150 周年記念シンポジウム」が実施された。

(1) 広瀬淡窓没後 150 年記念事業 (日田市開催分)

この事業は廣瀬淡窓が逝去した安政3年(1856)から150年が経過した平成17年(2005)に執り行った事業で、日田市及び日田市教育委員会が中心となって「広瀬淡窓没後 150 年記念事業実行委員会」を立ち上げ、市内の文化団体や学校など市民と一体となった事業が展開された。

【日田市・日田市教育委員会主催】

◆記念式典及び記念講演会

日 時 平成17年11月2日(水)
場 所 日田市中央公民館(文化センター)ホール
内 容 記念式典及び記念講演会
演 題 「広瀬淡窓先生の教えを 今日教育に活かす」～敬天の思想と実践を中心に～
講 師 元日本女子大学教授 石川 松太郎 氏

◆咸宜園「夜なべ談義」

日 時 平成17年11月2日(水)午後4時～午後7時
場 所 史跡咸宜園跡(秋風庵・遠思楼)

◎開会行事 史跡咸宜園跡秋風庵前

[基調講話]

演 題 「平成咸宜園をめざして」
講 師 淡窓会副会長 佐藤 誠一郎 氏

〔「夜なべ談義」分科会(各職名は当時のもの)〕

テ ー マ 「咸宜文化」と「人・まちづくり」～淡窓先生が目指したもの～

第1分科会(秋風庵1階茶の間) 参加人数 24名

- ・テーマ 「町づくりを語る」
- ・講 師 後藤 宗俊 氏(別府大学教授)
- ・座 長 木下 弘一郎 氏(豆田伝建保存会事務局長)

第2分科会(秋風庵1階座敷の間) 参加人数 16名

- ・テーマ 「ひとを育てる」
- ・講 師 末広 利人 氏(別府大学教授)
- ・座 長 渡辺 良枝 氏(咸宜小学校教頭)

第3分科会(遠思楼2階) 参加人数 17名

- ・テーマ 「芸術にふれる」
- ・講 師 深町 浩一郎 氏(大分県文化振興課課長補佐)

◆咸宜小学校・桂林小学校の公開授業

場 所 日田市立咸宜小学校、桂林小学校
対 象 保護者、一般

◆広瀬淡窓先生の足跡さがし「淡けん・淡さく・淡きゅうウォーク」

場 所 日田市中央公民館(文化センター)集合、豆田地区
対 象 日田市立咸宜小学校、桂林小学校4年生児童及び一般50名

◆広瀬淡窓没後150年展(遺墨展) 場所 天領日田資料館

期 間 平成17年10月27日(木)～11月8日(火)

◆創作和紙人形展『咸宜園の四季』及び『咸宜園発掘調査遺物遺品展』

期 間 平成17年10月25日(火)～11月7日(月)
場 所 日田市役所1階ロビー

◆長三洲遺墨展(場所 日田豆田文化交流館)

期 間 平成17年10月30日(日)～11月6日(日)

◆記念展示会「明治維新を駆け抜けた咸宜園の門人たち」

期 間 平成17年10月31日(月)～11月6日(日)
場 所 日田市中央公民館
協 力 石川恵夫(山口市銭鑄司)・江崎べっ甲店・(学)産業能率大学最高顧問 上野一郎・清浦記念館・

錢鑄司郷土館（山口市）・長崎県・長崎市・長崎市教育委員会・長崎歴史文化博物館・長崎大学
医学部・広瀬資料館・姫野順一（長崎大学環境科学部教授）・日本大学芸術学部・山鹿市教育委
員会・山口市教育委員会・山口市歴史民俗資料館（五十音順 敬称略）

◆明治維新を駆け抜けた咸宜園の門人たち（上野彦馬、大村益次郎、清浦奎吾展）及びふるさと日田の歴史
フォトコンテスト作品展示

期 間 平成 17 年 10 月 31 日（月）～ 11 月 6 日（日）

場 所 日田市中央公民館（文化センター）

受付期間 平成 17 年 10 月 18 日（火）～ 10 月 20 日（木）

◆小中学校書写展（文教祭事業） 場所…日田市中央公民館（文化センター）

期 間 平成 17 年 11 月 2 日（水）～ 11 月 4 日（金）

◆淡窓図書館所蔵『全国古今書家名品展』 場所 淡窓図書館 2 階研修室

期 間 平成 17 年 10 月 29 日（土）～ 11 月 3 日（木）（※但し、31 日は休館）

【日田市が後援した関連行事】

◇第 9 回「平成淡窓祭」（主催 淡窓会）

期 日 平成 17 年 11 月 1 日（火）

場 所 史跡咸宜園跡（秋風庵）

内 容 慰霊祭ほか

◇広瀬淡窓没後 150 年記念 文化講演会及び一絃琴演奏会

期 日 平成 17 年 11 月 2 日（水）

演 題 廣瀬淡窓と長茨

講 師 宇佐市文化財調査委員 中島 三夫 氏

演 奏 会 清虚洞一絃琴 宗家四代 峰岸 一水 氏ほか

場 所 かんぼの宿日田

主 催 日田簡易保険保養センター（かんぼの宿日田）（財）簡保加入者サービス協会日田支部

◇淡窓一門書作展並びに古硯展

場 所 ヤマニランド 2 階展示場

主 催 (株)ヤマニ

◇別府大学日田歴史文化講座

テ ー マ 広瀬淡窓・咸宜園とひたのまちづくり

期 間 平成 17 年 9 月から 12 月まで（全 7 回の内、主な講演を下記に紹介）

期 日 平成 17 年 9 月 10 日（土）

演 題 「咸宜園と明治維新」

講 師 別府大学 末広 利人 氏

場 所 別府大学日田歴史文化研究センター

主 催 別府大学日田歴史文化研究センター・日田市

◇第 30 回吟剣詩舞道大会

期 日 平成 17 年 9 月 11 日（日）

場 所 日田市中央公民館（文化センター）

主 催 淡窓伝光霊流日田詩道会

【その他の協賛行事】

○吟詠奎堂流正吟伝詩館（藤本 奎月 館長）

内 容 CD「広瀬淡窓玉韻集」製作

(2) おおいた教育の日関連事業「広瀬淡窓没後 150 周年記念シンポジウム」

期 日 平成 17 年 12 月 17 日（土）

[基調講演]

演 題 咸宜園 - 広瀬淡窓の全人教育

講師 京都学園大学学長 海原 徹 氏

[吟詠]

構成吟「広瀬淡窓 詩の旅」七首

吟者 大分県高等学校文化連盟 吟詠剣詩舞部

[パネルディスカッション]

演題 咸宜園 - 淡窓の教育理念と人材育成を学ぶ

パネリスト

京都学園大学学長 海原 徹 氏

神戸女子大学名誉教授 林田 慎之助 氏

長崎大学教育学部助教授 鈴木 理恵 氏

学校法人東明館学園 中学校・高等学校副校長 西村 隆司 氏

コーディネーター

大分大学教育福祉科学部教授 豊田 寛三 氏

場所 平和市民公園能楽堂（大分市牧緑町）

主催 大分県・大分大学・大分県教育委員会

平成 22 年度

【咸宜園教育研究センターの開館】

平成 22 年度には廣瀬淡窓や咸宜園教育の調査・研究を行う機関が教育委員会の中に設立された。国内においては教育をテーマとする博物館・資料館は玉川大学教育博物館、京都市学校歴史博物館、唐澤博物館など数えるほどしかなく貴重な研究機関といえる。



市の組織図では教育庁文化財保護課の一機関であり、本課は文化財としての保存や整備、管理などを担当し、当センターでは調査研究と普及啓発の分野を担っている。詳しくは「咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例」などを参照願いたい。

平成 23 年度

【咸宜園教育顕彰事業の創設】

本市では、廣瀬淡窓や咸宜園教育の理念とその業績を顕彰し、さらに継承するため本事業（「学術研究部門」及び「教育文化部門」）を創設した。毎年、廣瀬淡窓や咸宜園の調査・研究活動の発展に寄与する著作物や淡窓が実践した咸宜園教育の普及に貢献した個人および団体の活動などを公募しており、優秀な作品等については咸宜園が開かれた 2 月 23 日の前後におこなう「咸宜園の日」記念事業において表彰している。以下、これまでの受賞者である。

受賞者一覧（所属や役職名などは受賞当時のもの）

[淡窓賞]

- ・平成 23 年度（第 1 回）教育文化部門で優秀賞となった「淡窓会」が受賞した。

（受賞団体） 淡窓会

（活動名） 会報誌『敬天』刊行事業

（評価内容） 廣瀬淡窓や咸宜園に関する唯一の定期刊行物として、会報誌の発刊活動は来年で 40 年の節目を迎える。会員による長年の調査研究の成果は秀逸で他にこのような例は見当たらない。

[学術研究部門]

- ・平成 23 年度（第 1 回）

（優秀賞） 明治期における東本願寺の清国布教について

二松学舎大学 非常勤講師 川邊 雄大 氏

- ・平成 24 年度（第 2 回）

（優秀賞） 下関開業時代における岡研介の事績および寄寓背景に関する考察、

- 本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開 -

九州国際大学客員教授 亀田 一邦 氏

・平成 26 年度（第 3 回）

（優秀賞）廣瀬淡窓とシーボルト事件

大分県立国東高等学校双国高校教諭 田本 政宏 氏

〔教育文化部門〕

・平成 23 年度（第 1 回）

（優秀賞）受賞団体 淡窓会

（活動名）会報誌『敬天』刊行事業

・平成 25 年度（第 3 回）

（優秀賞）受賞者 豆田上町祇園山鉦振興会事務局長 梅山 秀人 氏

作品名 「廣瀬淡窓時代の日田祇園」

（優秀賞）受賞者 佐伯史談会 佐藤 巧 氏

作品名 （1）「中島子玉の日本史」「中島子玉の人物志」（和綴じ本）

（2）「若き日の松下筑陰」「松下筑陰の人物志」（和綴じ本）

（優秀賞）受賞者 三花公民館長 中島 龍磨 氏

作品名 「咸宜園の教えを道徳教育に取り入れ、豊かな心を培う～淡窓教育の学校教育・社会教育への転用～」(実践報告書)

・平成 27 年度（第 5 回）

（優秀賞）受賞者 日本写真作家協会会員 香川 良海 氏

作品名 「写真を通した咸宜園教育の普及と実践『門下生・上野彦馬（写真家）が見た日田・咸宜園』」

・平成 28 年度（第 6 回）

（優秀賞）受賞団体 点訳ボランティア「たんぼぼの会」代表 宗 宏司 氏

活動内容 「咸宜園関連書の点訳及び点訳書の寄贈」

・平成 29 年度（第 7 回）

（優秀賞）受賞団体 淡窓研究会 会長 廣瀬 貞雄 氏

活動内容 昭和 42 年（1967）に東京で設立した研究会で廣瀬淡窓や咸宜園教育関係者の顕彰及び学術研究を年 2 回行っている。

【「咸宜園の日」の設立】

「咸宜園の日」に関する要綱（平成二四年二月一日施行）

「咸宜園の日」に関する要綱を次のように定める。

（目的）

第 1 条 この要綱は、江戸時代後期、身分や階級制度の厳しい時代に、儒学者であり詩人であった廣瀬淡窓が、学歴・年齢・身分を問わない三奪法により全ての門下生を平等に教育し、文化十四年（1817 年）から明治三十年（1897 年）までの八十年間続いた咸宜園の理念と業績、廣瀬淡窓や門下生等についての理解を深め、郷土を愛する心を育むことを目的に「咸宜園の日」を定める。

（期間）

第 2 条 廣瀬淡窓が咸宜園を開いた日である二月二十三日を毎年「咸宜園の日」とする。

（咸宜園の日の促進）

第 3 条 当該日を、廣瀬淡窓や咸宜園の教育及び門下生等についての理解を深め、郷土を愛する心を育む日とし、咸宜園の日又はその前後に日田市教育委員会が主催する講演会や講座に対して広く市民の参加を促進する。

附 則

この告示は、平成二十四年二月一日から施行する。

平成 24 年度

【廣瀬旭荘没後 150 年記念事業】

廣瀬旭荘（1807～1863）は淡窓の 25 歳年下の弟で、幼少から淡窓の咸宜園で学んでいた。その後、17 歳で筑前福岡の亀井塾に遊学し、日田に帰郷してからは淡窓の咸宜園経営を援けた人物である。一時は淡窓の養子

となった時期もあったが、天保7年（1836）に当時の日田郡代塩谷大四郎との確執が原因で日田を離れ、大坂で開塾することになった。江戸での開塾や仕官の思惑もあったがかなわず、人生の大半を大坂で過ごしている。

晩年は大坂町奉行から大坂城の儒官として「御城入り儒者」の声がかかるほど著名な文人の一人として活躍したが、文久3年（1863）摂津池田で没した。墓は大阪天王寺の統國寺（旧は邦福寺）と淡窓らが眠る日田の長生園にある。

現在、統國寺には墓石のみが建つ。一時は門弟らにより墓誌（墓碑）の建立が計画されていたが実現しなかった。その後、旭荘の顕彰事業や記念事業は管見のかぎり見当たらないが、大正13年刊行の『池田人物誌下』（稲束猛・吉田鋭雄共著）や同14年の『廣瀬旭荘』（橋爪兼太郎・非売品 廣瀬家発行）、平成59年（平成8年復刻）に刊行された『日田の先哲』（日田市教育委員会）などで事績を知ることができる。以下、日田市・日田市教育委員会等が実施した記念事業を紹介する。

〔日田市・日田市教育委員会主催〕

◆記念講演 詩人廣瀬旭荘の「絆」

講 師 東京大学大学院教授 ロバート キャンベル 氏
期 日 平成24年8月19日（日）
場 所 日田市民文化会館パトリア日田（小ホール）

◇記念鼎談

登壇者 佐賀大学名誉教授 井上 敏幸 氏
東京大学大学院教授 ロバート キャンベル 氏
直木賞作家 葉室 麟 氏
司会（門下生子孫） 米谷 奈津子 氏

期 日 平成24年8月19日（日）
場 所 日田市民文化会館（パトリア日田）小ホール
主 催 日田市・日田市教育委員会・財団法人自治総合センター
後 援 総務省・大分県・大分県教育委員会・財団法人廣瀬資料館・大分合同新聞社・西日本新聞社



◆特別展「廣瀬旭荘 - 東遊 大坂 池田 - 」

期 間 平成24年8月17日（金）～9月30日（日）
場 所 咸宜園教育研究センター

◇定期講座（全4回）

平成24年9月27日（木）「淡窓・旭荘の往復書簡」
佐賀大学名誉教授 井上 敏幸 氏
平成24年9月28日（金）「大塩の乱と廣瀬旭荘」
帝塚山学院大学准教授 福島 理子 氏
平成24年10月6日（土）「廣瀬旭荘と幕末の大坂」
大阪大学講師 合山 林太郎 氏
平成24年10月27日（土）「江戸における廣瀬旭荘」
明治大学教授 徳田 武 氏
場 所 咸宜園教育研究センター

◆ロバート キャンベル先生と高校生との交流会

「ロバート キャンベル氏の漢詩を楽しむ方法（高校生編）」

内 容 日田市内五つの高等学校の生徒が詩吟や書道を通して廣瀬旭荘や廣瀬淡窓の漢詩に触れることにより。漢詩の意味や楽しむ方法を学ぶことを目的とした。

期 日 平成24年8月19日（日）
場 所 日田市民文化会館パトリア日田（小ホール）
主 催 咸宜園教育研究センター
協 力 昭和学園高等学校・日田高等学校・日田三隈高等学校
日田林工高等学校・藤蔭高等学校（順不同）



〔その他の協賛行事〕

◆平成 24 年度特別展「廣瀬旭荘と池田・大坂」

期 間 平成 24 年 10 月 19 日（金）～ 12 月 2 日（日）

場 所 池田市立歴史民俗資料館 主催 池田市立歴史民俗資料館

平成 28～29 年度

—平成 28 年度分—〔日田市・日田市教育委員会主催〕

〔プレイベント〕

◆企画展「廣瀬旭荘・敬四郎文庫」～旭荘が子孫に伝承した史料群～

期 間 平成 29 年 2 月 16 日（木）～ 3 月 31 日（金）

場 所 咸宜園教育研究センター公開展示室

主 催 日田市・日田市教育委員会

【咸宜園開塾 200 年記念事業 記念式典・記念講演等】

・平成 29 年 2 月 19 日（日）

記念式典 参加者 850 名

記念講演会 「偉大なる教師 - 廣瀬淡窓と吉田松陰 - 」

京都大学名誉教授 海原 徹 氏

記念鼎談 「江戸の教育に学ぶ～咸宜園の軌跡～」

京都大学名誉教授 海原 徹 氏

東京学芸大学副学長 大石 学 氏

大分県知事 広瀬 勝貞 氏

記念アトラクション

（合唱）日田少年少女合唱団 題目「東天寮歌」（自由学園男子寮歌）・題目「清風寮歌」（自由学園女子寮歌）

（詩吟）淡窓伝光霊流日田詩道会 題目「桂林荘雜詠示諸生」「隈川雜詠」

場 所 日田市民文化会館（パトリア日田）大ホール

主 催 日田市・日田市教育委員会

◆『図説 咸宜園—近世最大の私塾—』の刊行（1200 部）頒布価格 1,000 円

◇書道展 市内小中学生の書道展の題材を「廣瀬淡窓」又は「咸宜園」とした。

〔二松學舎大學との共催〕

◆記念講演会「明治期の咸宜園関係の漢詩人たち」

講 師 二松學舎大學学長 石川 忠久 氏

期 日 平成 28 年 12 月 5 日（月）

場 所 日田市役所 7 階大会議室

主 催 日田市・日田市教育委員会

共 催 二松學舎大學

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代 日本の「知」の形成と漢学」

—平成 29 年度—〔日田市・日田市教育委員会主催〕

◆「咸宜園門下生遺墨展」

内 容 「日田先哲研究会」の協力のもとで開催した。研究会は、これまでも咸宜園出身者の平野五岳や長三洲の遺墨集の刊行や展示会を企画しており、日田の先人や先哲の普及啓発活動に努めてきた団体である。本展では、会員が所蔵する咸宜園出身者の書幅を中心に展示をおこない、展示図録『咸宜園門下生遺墨撰集』（限定出版 300 部）を刊行した。

展 示 咸宜園歴代塾主や門下生の作品 約 140 点

期 間 平成 29 年 9 月 3 日（日）～ 17 日（日）

場 所 日田市民文化会館（パトリア日田）ギャラリー

主 催 日田市・日田市教育委員会

共 催 日田先哲研究会



◇「嚶鳴フォーラム in ひた」平成29年11月10日～11日（全2日間）

全国14自治体が加盟する嚶鳴協議会（事務局：愛知県東海市）の日田大会を記念事業の一環として取り組んだ。例年、「嚶鳴フォーラム」では、講演会やシンポジウムの開催、市町長会議や教育長会議等を併せて開催している。日田大会では、フォーラムの記念講演と鼎談について一般の参加が可能な公開事業とした。

期 日 平成29年11月11日（土）

記念講演 「先哲に学ぶ - 歴史が現代に語りかけるものとは？」

講 師 童門 冬二氏（歴史小説作家）

鼎 談 童門 冬二氏（歴史小説作家）

吉田 公平氏（東洋大学名誉教授）

後藤 宗俊氏（別府大学名誉教授）

聞き手 岡野 涼子氏（大分大学COC＋推進機構コーディネーター）

場 所 日田市民文化会館（記念講演・鼎談）・咸宜小学校（10日の開会行事・学校見学）

主 催 日田市・日田市教育委員会 共催 嚶鳴協議会 企画協力 PHP研究所



【咸宜園開塾200年記念事業・「咸宜園の日」記念事業との共催】

〔第1部～第3部〕平成30年2月24日（土）～〔第4部〕25日（日）まで全2日間の日程で実施した。

〔第1部〕「咸宜園の日」記念式典・「咸宜園門下生子孫の集い」

オープニング 詩吟「休道之詩」（日隈こども園）

・「咸宜園教育顕彰事業」表彰式典

〔教育文化部門〕

優秀賞 淡窓研究会（会長 廣瀬 貞雄氏）

講 評 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊氏

・「日本遺産活用アイデア募集事業」表彰式典

〔アイデア部門〕

優秀賞 春末 京香さん（大分県立日田高等学校3年）

・特別発表「咸宜園世界遺産登録推進小学生作文コンクール」作文発表会

（豆田地区振興協議会主催）



◆「咸宜園門下生子孫の集い」

司会進行 米谷 奈津子氏（門下生「米谷春里」子孫）

開会宣言 廣瀬 貞雄氏（廣瀬家十一世・公益財団法人廣瀬資料館理事長）

記念講話 「咸宜園と門下生たち」

講 師 別府大学名誉教授／咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊氏



〔第2部〕記念講演会

司会進行 米谷 奈津子氏

記念講演 テーマ「江戸時代の人々にとっての学び」

講 師 法政大学総長 田中 優子氏

場 所 日田市民文化会館（パトリア日田）小ホール



〔第3部〕交流イベント「咸宜園門下生子孫の集い」

司会進行 米谷奈津子氏

記念対談（対談者）

法政大学総長 田中 優子氏

別府大学名誉教授／咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊氏

門下生子孫代表挨拶・乾杯

岩尾昭和学園理事長 草野 義輔氏（門下生「草野半市」「草野禮作」他の子孫）

アトラクション 演奏 日田祇園囃子なでしこ会

門下生子孫及び先人顕彰会のご紹介

門下生子孫 筑紫女学園大学学長 中川 正法 氏（門下生「釈 僧鑑」子孫）

高野長英顕彰会会長 今野 健 氏

場 所 「みくまホテル」



〔第4部〕「淡窓ゆかりの地ウォーキング」

参加対象：門下生子孫と日田市民

咸宜園や長生園、豆田町などの関係施設を約80名が巡った。

◆『廣瀬淡窓日記』の刊行

長崎大学名誉教授の井上源吾氏による淡窓日記の現代語訳『廣瀬淡窓日記』一～四（文化10年8月から弘化3年7月まで収載：刊行年1998～2005）が発刊されているが、惜しくも志半ばで逝去され遺作となった。そこで日田市では氏の遺志を継ぎ、日記の翻刻作業を再開することにした。平成29年度は井上氏がすでに翻刻した範囲を一部重複するが、改めて弘化3年1月から嘉永2年12月までの間を『廣瀬淡窓日記（続編一）』として平成30（2018）年3月に刊行した。

平成30年度

【咸宜園教育研究センター研究奨励事業の創設】

事業の概要（以下、平成30年度咸宜園教育研究センター研究奨励事業募集要項より抜粋）

趣 旨：咸宜園教育研究センターでは、平成29年2月に咸宜園開塾200年（1817－2017）を迎えたことを機に、廣瀬淡窓や咸宜園など近世～近代にかけての教育・文化に関する研究の一層の推進を図るため、国内及び地域に根差した研究者の活動を奨励する事業を行います。この事業による研究成果は、日田市の歴史・文化を生かしたまちづくりや文化財の保存・継承などの事業に活かしていきます。また、咸宜園教育研究センターの取り組みとして、市民の皆様にも積極的に公開・提供いたします。

研究課題：①廣瀬淡窓・咸宜園・咸宜園門下生及び私塾・学校などをテーマとする歴史・文化についての幅広い分野の個人の研究活動。

②上記①の課題を含む日田市在住・出身者による日田市域の近世～近代にかけての歴史・文化を中心とした個人の研究活動。

応募資格等：①日本在住の研究者（大学院生を含む）で個人とします。国籍は問いません。

②日田市内に住所を有する個人、又は日田市出身者。

〔平成30年度事業採択内容〕

（1）「漢文教科書および漢詩集に採録された咸宜園関係者の漢詩文に関する研究」（研究課題①）

事業採択者 二松學舎大学講師 川邊 雄大 氏

（2）「廣瀬淡窓旧宅の建物に関する研究」（研究課題②）

事業採択者 建築士 松岡 亜紀 氏

おわりに

以上、これまでに実施された廣瀬淡窓や咸宜園に関する顕彰活動及び記念事業の内容について整理してきた。当局で把握していない顕彰事業もあると思われるが、淡窓会の『敬天』の創刊号以降、まとまったものが無かったため、咸宜園開塾200年記念事業の報告を行うにあたって掲載したものである。本稿が今後、廣瀬淡窓や咸

宜園に関する顕彰活動や記念事業のあり方を考える際に参考となれば幸いである。なお、本内容は『咸宜園教育研究センター研究紀要第7号』（咸宜園開塾200年記念号）に掲載した「咸宜園開塾200年記念事業の開催にあたって—これまでの顕彰事業の歩み—」を基にして写真画像を追加し、加筆修正を行ったものである。

【附編】廣瀬淡窓は、現在の地で「咸宜園」を開塾して間もない時期に「卜居」と題した漢詩を作っている。

卜居

永山南二里 有邸名濠田 茂林互榮帶 流水自潺湲 維歲之丁丑 我始經營焉 屋以白茅葺 籬以枯竹編 籬前種楊柳 屋後種琅玕 圃有葵與薑 庭有菊與蘭 室中僅容膝 蕭疎三四間 上下一小樓 歷歷見南山 西北開家塾 蒙士所周旋 書聲穿亂竹 旦夕琅琅然 東是伯父宅 棲隱已多年 竊追二阮迹 與結林下歡 呂氏十餘戶 信步亦往還 每時買村酒 相會話團樂 我有煙霞疾 而無名利緣 既卜樂郊居 將學碩人寬 臨水弄遊魚 望林數歸鶩 何以名吾室 請名以考槃	永山 南のかた二里 邸有り 濠田と名づく 茂林 互いに榮帶し 流水 自から潺湲たり 惟れ歳の丁丑 我始めて焉に經營す 屋は白茅を以つて葺き 籬は枯竹を以つて編む 籬前に楊柳を種え 屋後に琅玕を種う 圃に葵と薑有り 庭に菊と蘭有り 室中は僅かに膝を容るのみ 蕭疎たり 三四間 上へ一小樓を架し 歴歴として南山を見る 西北に家塾を開き 蒙士の周旋する所 書聲 乱竹を穿ち 旦夕 琅琅然たり 東は是れ伯父の宅 棲隱して已に多年 竊かに二阮の迹を追ひ 与に林下の歡を結ぶ 呂氏 十餘戸 歩みに信かせて亦た往還す 每時 村酒を買い 相い会して團樂を話す 我有煙霞の疾有り 而るに名利の縁なし 既に卜して郊居を樂しむ 將に碩人の寬に學ばんとす 水に臨みて遊魚と弄れ 林を望んで歸鶩を教う 何を以つて吾が室を名づけん 請名するに考槃を以つてす
--	---

卜居（ぼくきよ）

水山城の南方二里のところに、濠田（堀田）と呼ばれる小さな村がある。樹木が繁茂した林がたがい帯のようにとりまいていて、一筋の小川が清らかな音をたてて流れている。今は文化十四年丁丑（ひのとうし）にあたる歳。私ははじめてここに塾を新しく経営することになった。屋根は白い茅でもって葺き、間垣はよく枯れた竹でもって編むことにした。間垣の前には、楊柳、しだれ柳を植えた。家屋の後には、琅玕、しなやかな竹を植えた。屋敷の島には、葵（ひまわり）と薑（豆）があり、その庭には菊と蘭が咲いている。部屋はわずかに膝をいれることができるだけの狭さだが、ほかに、蕭疎、すがすがしい部屋が三つ四つある。家屋の上に小さな橋を架けて二階の小部屋をこしらえたが、そこから南山をはつきりみることができ、家の西北で家塾を開き、そこは、蒙士、若い学生たちが自分たちの手できりもりしている。そこから書物を読む声が乱竹の間をうきとどいて、朝な夕な鳥のさえずりのように清らかに聞こえてくる。東は伯父月化の居宅だが、すでに多年ここに隠棲して、ひそかにあの竹林の七賢の阮咸の事跡を慕い、私ともども竹林の遊びをたのしむと誓い合っている。村人の家といえは、十餘戸あるだけで、歩みにまかせてそぞろに往来することあることに私は地酒を買い、出会うとなごやかに村人と語り合っている。私には煙霞、山水を愛するつよい気持ちがあるが、名誉や利益にはまったく縁がない。すでにこの地に屋をかまえて村住いをたのしんでいるし、これからは徳ある人の寛容さを学びたい。小川に遊んでは、流れに遊ぶ魚にたむわれ、林をはるかにみて果に帰る鶩の群を教える。どんな名を私の家塾につけようか。できれば考槃、世俗を離れて隠遁を楽しむという意味の名をあてることにしよう。

【参考文献】

日田郡教育会編 [1913] 『淡窓先生小伝』 日田郡教育会
 日田郡教育会編 [1916] 『贈従五位廣瀬久兵衛小伝』 日田郡教育会
 橋爪兼太郎 [1925] 『廣瀬旭莊』（私家版）
 大元玄一 [1934] 『孝弟烈女廣瀬秋子』 廣瀬正雄
 廣瀬正雄 [1965] 『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』 廣瀬八賢顕彰会
 池田範六 [1972] 「淡窓先生遺徳顕彰のかずかず」（『敬天』創刊号） 淡窓会
 廣瀬先賢顕彰会編 [1973] 『日田廣瀬家三百年の歩み』 廣瀬先賢顕彰会
 廣瀬先賢顕彰会（中野 範）編 [1974] 『咸宜園出身八百名略伝集』 廣瀬宗家
 『廣瀬正雄伝』（全三巻） [1974]（廣瀬正雄先生伝記刊行会編）
 廣瀬先賢顕彰会（中野 範）編 [1975] 『咸宜園出身二百名略伝集』 咸宜園出身 800 名略伝集続編（一）
 大久保正尾 [1981] 『淡窓先生』（廣瀬淡窓先生生誕 200 年記念） 日田市教育委員会
 海原徹・後藤宗俊・吾妻重二・江面嗣人・吉田博嗣ほか [2013] 『廣瀬淡窓と咸宜園 - 近世日本の教育遺産として - 』
 日田市教育庁文化財保護課編 [2016] 『史跡咸宜園跡保存整備事業報告書』 日田市教育委員会
 海原徹・後藤宗俊・豊田寛三ほか [2017] 『図説 咸宜園 - 近世最大の私塾 - 』 日田市教育委員会

咸宜園開塾二〇〇年記念事業記録集「咸宜園」

発行日 平成三二(二〇一九)年三月三二日

編集・発行 日田市教育庁咸宜園教育研究センター

〒877-0012

大分県日田市淡窓二-二-一八

印刷・製本 日田時報紙器印刷株式会社